

第 2 章 長野市の歴史的風致形成の背景

1 歴史的風致の舞台としての自然

(1) 地勢

長野市は、本州の中央部長野県の北部に位置し、上信越高原国立公園の飯縄山、戸隠山、黒姫山（信濃町）等の北信五岳を背景に、面積は834.85 k m²、広さは東西36.5km、南北41.7 km、市域の最高地点は高妻山頂の2,353 m、最も低いのは豊野町浅野地区の327.4 mとなっている。市域での標高差は、実に2,025.6 mもある。そのうち標高600 m以下の土地が約60%（県平均11.5%）を占めている。平坦部には、1級河川である千曲川、犀川の二大河川が流下し、長野盆地を形成している。

明治30年（1897）に市制を施行して県庁のある県内初の市となった。このときの市域の面積は9k m²、人口は3万人に過ぎなかった。その後、大正12年（1923）、昭和29年（1954）の編入合併、昭和41年（1966）の大合併、平成17年（2005）、平成22年（2010）の編入合併を経て人口約39万人の長野市となった。



長野市の位置

(2) 地形

①地形概観

長野市の地形は大きく区分すると、中心にある長野盆地とその西側の西部山地、東側の東部山地の3地域に分けられる。西部山地山麓線には、聖川扇状地、犀川扇状地、裾花川扇状地、浅川扇状地の4つの扇状地が南から北へと並んでいる。東部山地の地形は西部山地に比べて急峻な壮年期の地形で、その山脚は盆地に向かって半島状に突き出し、千曲川の氾濫原や支流の扇状地下に没している。

盆地西縁部では、裾花凝灰岩から構成される急斜面からなる山地と盆地の平坦地との境界に極めて明瞭な断層が直線的に連続する。弘化4年（1847）に発生した善光寺地震（マグニチュード7.4）は、この盆地西縁部の活断層が動き発生した大規模な内陸直下型地震であった。

東西山地帯に囲まれた低地が長野盆地であり、第4紀中ごろに形成された盆地で、大部分が沈降した盆地域に千曲川・犀川の洪水時の氾濫原堆積物や周辺山地から流下する扇状地堆積物などによって肥沃な沖積地が形成されている。千曲川の下流域に形成された中央高地を代表する広大な盆地で、最大幅10km、南西から北東に長軸をもつ狭長な盆地



長野市域の地形概観 S=1/300,000

で、面積は 300 k m² である。標高は 330 m から 360 m で、高度差が 30 m ときわめて低平な盆地となっている。長さは千曲市の粟佐橋から中野市の立ヶ花までの 30km である。傾斜地の多い長野県にあって、長野盆地は、1,000 分の 3 度未満の平坦地の割合が高いことが特徴となっている。

戸隠地区は、長野市中心市街地からは北西部に位置し、標高 2,000 m を超える戸隠山や荒倉山、飯縄山に三方を

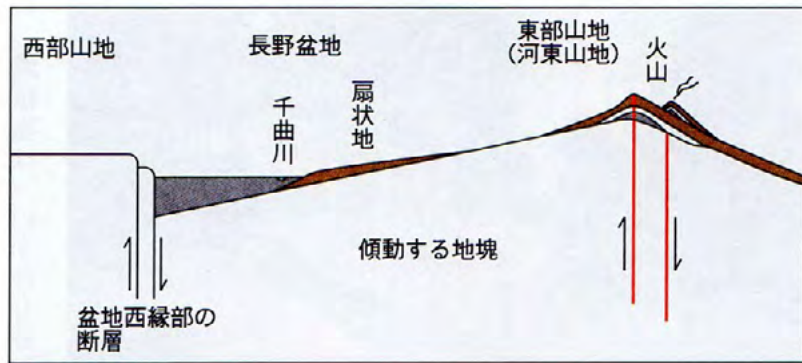
囲まれた標高 1,000 m を超える高原地帯である。約 400 万年前の浅い海の地層から、貝などの化石（シナノホタテ、シガラミサルボウ等）が豊富に産出する。平成 17 年（2005）に長野市に編入合併し、現在に至っている。

鬼無里地区は、長野市の西部、戸隠地区のさらに西側に位置し、長野市中心部から西へ約 20km ほど裾花川を遡り、裾花峡（裾花溪谷）を抜けると谷が開け、鬼無里盆地となる。

この盆地を中心に広がる中山間地であり、川沿いの沖積地と河岸段丘の平地、大部分の面積を占める山地とで構成される。日本書紀には、天武天皇（7 世紀後半）の信濃への遷都計画が記されており、それが鬼無里の地であり、現在ある東京、西京ひがしきょう にしきょうなどの地名は、その時の遷都に由来しているという遷都伝説がある。

鬼無里地域には約 1,000 万年から約 200 万年前に堆積した様々な地層が広がっており、奥裾花溪谷ではこれらの地層が南北方向で V 字状に曲げられた「褶曲構造」や、傾いた地層が広大な面をなして階段状になっている「ケスタ地形」、「ハチノス状風化岩」などがみられ、雄大な溪谷美をつくり上げている。

こうした長野盆地や周辺の山地、千曲川や犀川が形



長野盆地の東西模式断面



シナノホタテ



シガラミサルボウ



ハチノス状風化岩

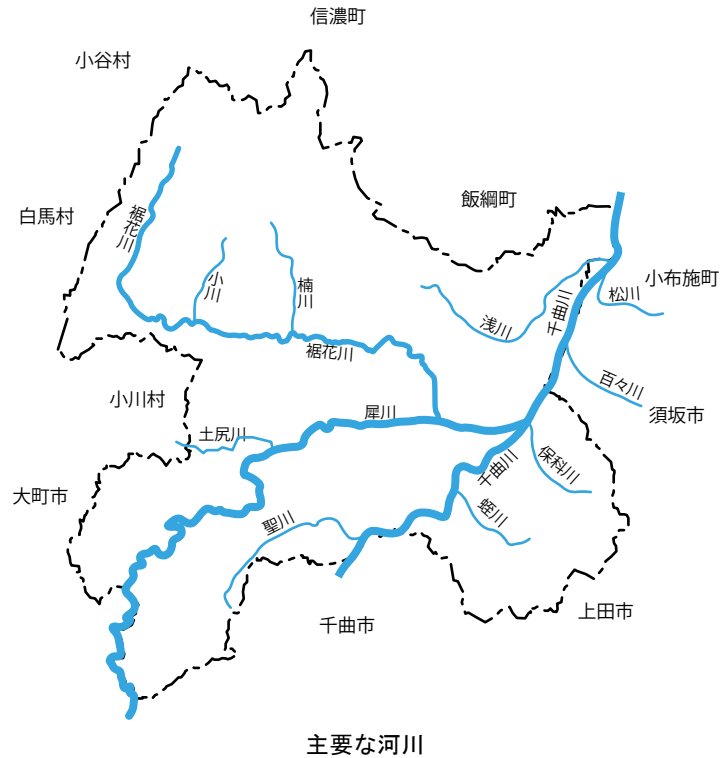
づくった地形がこの地域に住んだ人々が現在まで歴史を織りなす舞台となった。

②千曲川

千曲川は山梨（甲斐）・埼玉（武蔵）・長野（信濃）3県の県（国）境である南佐久郡川上村甲武信ヶ岳（標高2,475 m）、金峰山（きんぽうさん 2,599 m）のコメツガ、シラビソの針葉樹林の北斜面を源とする。多くの支流を樹枝状に合流しながら、新潟県境の下水内郡栄村まで213.5km、標高差では2,000mを流れ下る日本有数の大河である。

千曲市の杭瀬下地点でほぼ90度流れを変え、蛇行しながら盆地を流れる。この千曲川へ西から聖川、犀川、浅川、東からは蛭川、保科川が合流する。蛭川は松代の街をのせる扇状地、保科川は若穂川田をのせる扇状地を形成している。千曲川は犀川扇状地の押し出しによって、盆地中央から南東側に押しやられ、長野盆地東部山地と西部山地との間に縦谷を造って流れる。さらに、千曲川は犀川の合流点から北流するにしがたい、西方から流れ込む川がないのに対して、東方から流入する百々川、松川などの堆積作用が強まるため、流路を盆地中央から西寄りに移している。

千曲市の杭瀬下で大きく流れを変えた千曲川は、1,000分の1度と河床勾配も緩やかになり、左岸側に長大な自然堤防を形成し、弥生時代以降現在に至るまで居住域となり、山際までの後背湿地も弥生時代から現在まで水田域となっており、農耕集落の原風景をつくり出している。



主要な河川



千曲川（長野市と千曲市の境）

③犀川

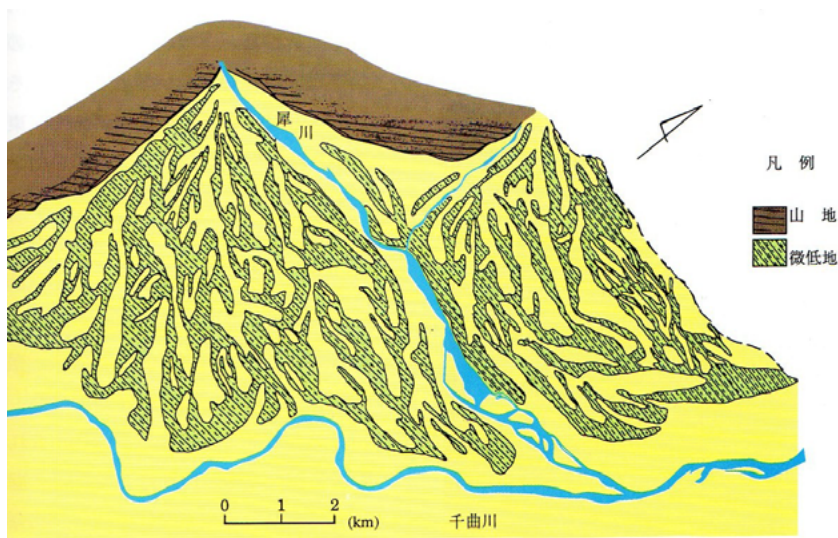
千曲川の最大の支流である犀川は、北アルプス槍ヶ岳（標高3,180m）から流れ出る梓川と高瀬川が合流して、長野市若穂の落合橋までおよそ100km、標高差2,800mを流れ下る。犀川は、横谷として西部山地を削り、犀口（篠ノ井小松原）で長野盆地に出て、その堆積物で川中島の扇状地を形成し、そのまま真東に流れて大豆島と若穂綿内地籍で千曲川に合流する。犀川に合流する



千曲川と犀川の合流部

裾花川は裾花川扇状地、その北部の浅川は浅川扇状地を形成している。

犀川は標高362mの犀口から東方に直線状に流下し、盆地東端の千曲川合流部（若穂綿内）の標高は338mで、この勾配は1,000分の2.6度で千曲



長野盆地の微地形（網状流路）

川に比べるとはるかに急勾配となっている。このため、犀川は犀口から網状に広がって流れも速く、砂礫を堆積しながら扇状地を形成した。犀川の網状流路により、微小な起伏が傾斜方向に放射状に配列し、微低地は旧河道、微高地は中州や自然堤防であり、微低地は水田や水路（堰）、微高地は集落・畑・果樹園に利用され、地形と生活環境が密接に結びついている。

（3）気候

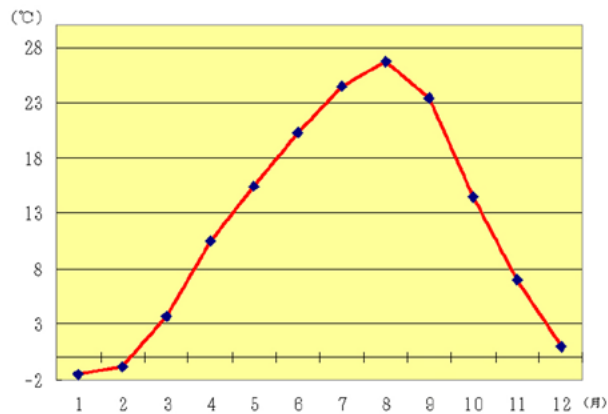
長野市は、長野盆地のほぼ中央部とその周囲の山地を占め、気候としては犀川をはさんで、北部は日本海側、南部は太平洋側の影響を受けやすく、気候上の地域差が大きい。また、四方を山に囲まれているため大陸内部によく似た、いわゆる内陸的な気候を示し、寒暖の差が大きく、降水量は少ない。しかし、冬の降雪量は比較的多く、平年値（昭和56年（1981）～平成22年（2010）の統計値）は170.1cmで、同じ内陸性気候である松本市の82.8cmの約2倍に達している。

○気温

内陸性気候の特徴の一つは、気温の年較差（月平均気温の最暖月と最寒月の差）や日較差（日最高気温と日最低気温の年平均の差）が大きいことである。

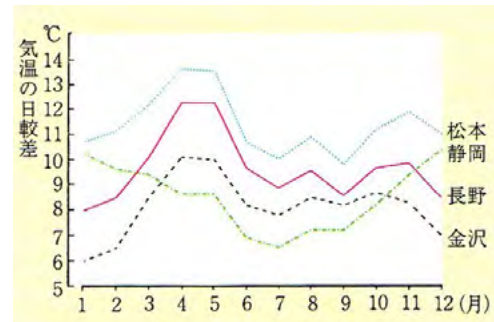
右の表からも分かるように、長野市など内陸部の気温の年較差や日較差は、静岡市など沿岸部と比べて2℃から3℃かそれ以上も大きい。また、内陸部と沿岸部の気温日較差の年変化のグラフからみると、長野や松本の変化の傾向は、静岡など太平洋気候の年変化型ではなくて、金沢など日本海岸気候の年変化型を示している。

	内 陸 部		沿 岸 部	
	長 野	松 本	金 沢	静 岡
年平均気温	11.5	11.2	14.1	16.1
平均年降水量	938	1011	2593	2327
1月の平均気温	-1.2	-1.0	2.9	6.1
最低気温の極値	-17.0	-20.7	-9.7	-6.8
0℃以下(冬日)の日数	112	125	40	30
8月の平均気温	24.8	24.1	26.6	26.7
最高気温の極値	38.6	38.5	38.5	38.5
30℃以上(真夏日)の日数	39	38	44	41
気温の平均年較差	26.0	25.1	23.7	20.6
年平均日最高気温	16.8	17.4	18.4	20.5
年平均日最低気温	7.2	6.0	10.3	11.9
気温の平均日較差	9.6	11.4	8.1	8.6
風速10m/秒以上の日数	10	5	6	3



長野市の月別平均気温

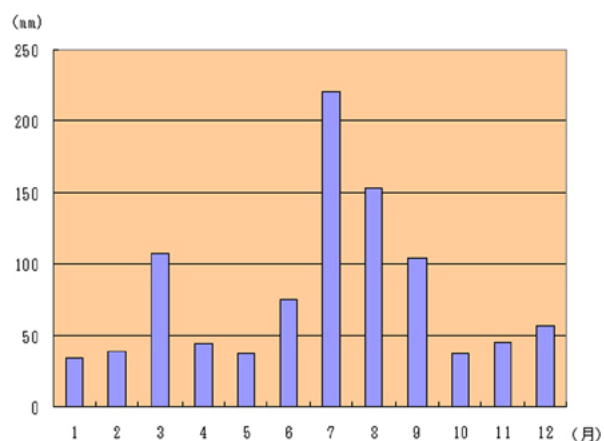
内陸部と沿岸の気候の比較



内陸部と沿岸部の気温日較差の年変化

○降水量

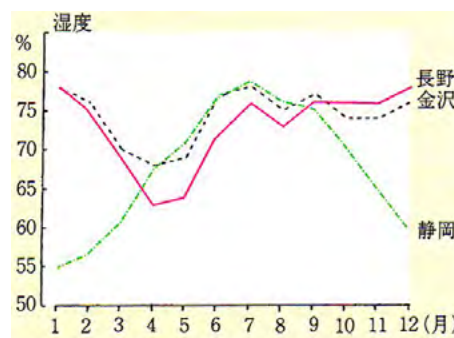
降水量が少なく湿度が低いことも内陸性気候の特徴である。長野市の年平均降水量は932.7mm(昭和56年(1981)～平成22年(2010)の統計値)で1,000mm未満となっている。日本で年降水量が1,000mm未満のところは、北海道東北部と長野県内の長野盆地から上田・佐久盆地にかけての平坦部であって、この2つの区域は日本列島で降水量の最も少ない地域である。長野市域の降水量は、平坦部では1,000mm未満であるが、周囲の山地では年平均1,200から1,500mmであり、地域差は大きい。



長野市の月別平均降水量

○湿度

沿岸部と内陸部の3都市における月平均湿度の年変化を現したグラフが右の図である。金沢と静岡は共に沿岸部の都市であるが、冬の日本海側の多湿に対して太平洋側では著しい乾燥状態になっている。長野市の冬の湿度が高いのは、日本海に近いことよりもむしろ海拔が高く、内陸特有の冷え込みで気温が低いためであり、水蒸気の絶対量で見ると日本海沿岸の地方よりはるかに少なくなっている。夏の湿度は両沿岸部ともきわめて高いが、それと比べて長野市はかなり低く、内陸の特性が雨期の湿度の差にもよく現れている。



中部地方における湿度の年変化

○霧の発生

気象現象の中で長野盆地では霧の発生が多く、年間発生日数11日（昭和56年（1981）～平成22年（2010）の平均値『理科年表』）のうちほぼ半数は秋に集中している。内陸にある長野では比較的大気安定する秋には、地面や山腹の放射冷却による冷たい空気が盆地にたまって発生する放射霧（盆地霧）が多い。千曲川や犀川沿いでは、暖かな川面に冷たい空気が触れてできる蒸気霧（川霧）の発生も加わるので、霧の日数が多くなる。霧にまつわる話では、川中島の第4回の戦い（永禄4年（1561））の中で、9月10日（現行暦10月28日）放射霧と蒸気霧が濃く立ちこめる未明をねらっての上杉勢の奇襲作戦が『甲陽軍鑑』に記されている。

○多様性を示す長野の気候

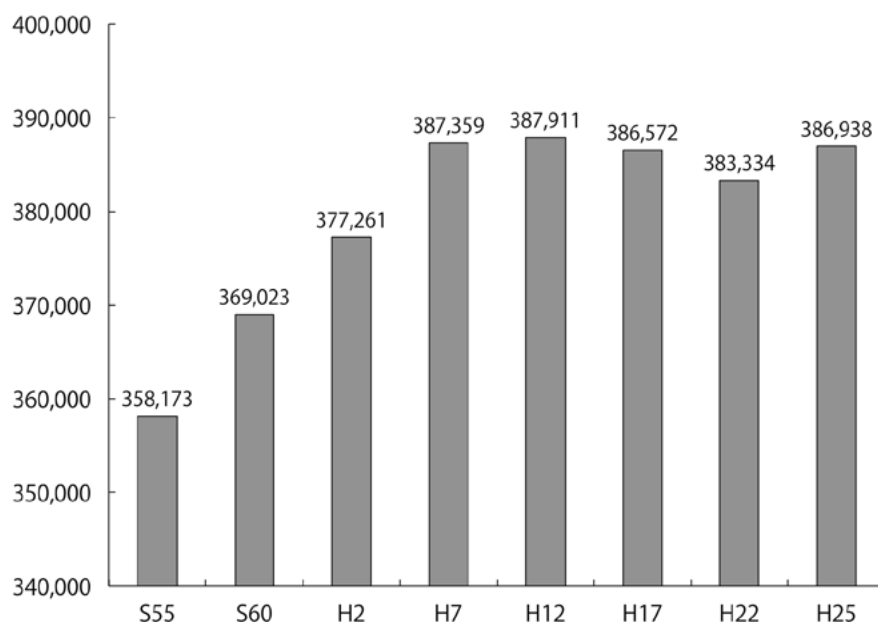
長野市における気温の日較差や湿度の年変化型では、日本海岸気候のタイプとなる。しかし、月別（または旬別）降水量の年変化や降水割合などからみると、太平洋岸気候のタイプとなる。長野市の気候といっても長野盆地の平坦地と山間地、犀川をはさんで北部と南部では、かなり違った様相を示している。総合すると、太平洋岸気候区の中の内陸気候区分に属するといえる。しかし、犀川より北では冬など日本海側の影響がよく現れ、日本海側気候と太平洋岸気候を複合した中間的な気候とみることができる。

2 社会環境

(1) 人口

長野県の県庁所在地である長野市は、平成 25 年（2013）1 月 1 日時点の人口が 386,938 人となっている。近年の町村合併によって市域が大きく広がるものの、人口については、合併町村がそれぞれ数千人規模ということもあってそれほど大きな変動はなく推移している。近年の長野市における町村合併の経緯は、平成 17 年（2005）1 月に、豊野町、戸隠村、鬼無里村、大岡村と合併し、平成 22 年（2010）1 月には、信州新町、中条村と合併した。長野市の人口のピークは、合併前の平成 12 年（2000）で、国勢調査によれば 387,911 人になっている。しかし、このとき既に、平成 17 年（2005）に合併した戸隠、鬼無里、大岡等で人口減少が続いていたため、平成 17 年（2005）の国勢調査では、人口が 386,572 人となり、初めて総人口が減少に転じた。その後、平成 22 年（2010）1 月の合併を経て、人口 383,334 人となるも、平成 25 年（2013）1 月では、平成 17 年（2005）の国勢調査時とほぼ同じ人口となっている。今後も総人口が徐々に減少していくとともに、長野市内の各地域をみたときに、旧合併町村を含めた周辺地域の人口減少と、その受け皿となる長野市街地への人口流入が続いていくものと想定される。

長野市の人口推移



資料：平成 17 年までは総務省「国勢調査」結果。平成 22 年以降は、長野市企画課の統計。
※平成 17 年の人口は、平成 17 年合併町村を含む。
※平成 22 年の人口は、平成 22 年合併町村を含む

(2) 産業

本市の第二次産業としては、食料品、出版・印刷、電子デバイス・情報通信機器関連などを中心に発展を続けてきたが、国際的な競争力が求められる今日、製造拠点の統廃合や海外シフトなどが進み、第二次産業から第三次産業へと産業構造が徐々に変化しつつある。また、第一次産業については、全体的な構成比は1%に満たないものの、従業者数を少しずつ伸ばしている状況であり、農業分野においては、長野市の土地特性である千曲川沿岸の肥沃な平坦地から標高1,000mの高冷地に至る広大な耕地を生かした、バラエティーに富んだ農産物を生産している。とりわけ、りんご、桃をはじめとした果物は、生産量も多く、全国の消費者から愛されるブランドとなっている。また、本市において消費量が多い大豆・小麦・そばなどは、これまで地域に根付いた食材として親しまれてきたことから、奨励作物に指定して生産の拡大を図っている。

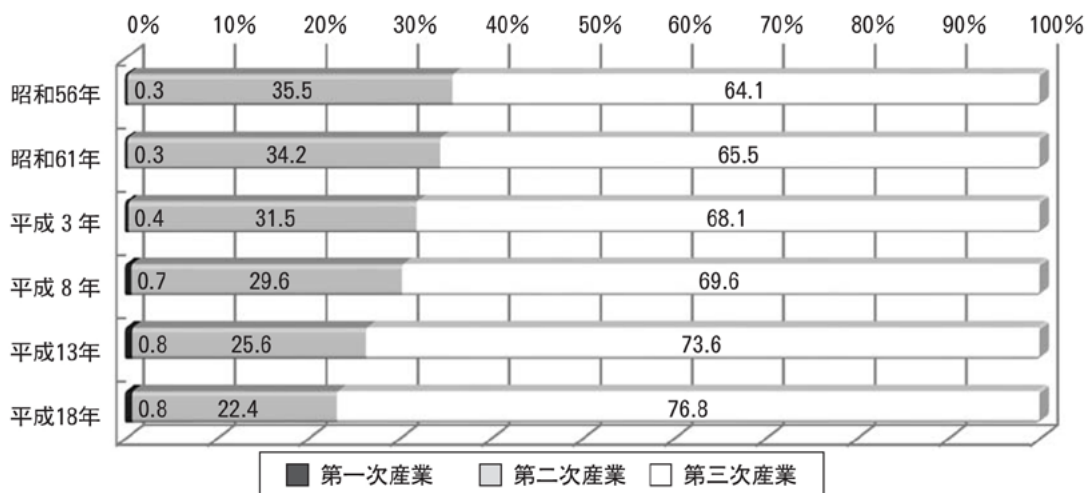
現在では、地域の特性や高い技術力を知的財産と結びつけ、新たな成長産業創出へと積極的に挑戦していくため、産・学・行（産：企業（産業界）、学：大学等の学術研究機関、行：行政機関）の連携にも力を入れている。

長野市の産業分類別従業者数の推移

<実数>

	昭和56年	昭和61年	平成3年	平成8年	平成13年	平成18年
総数	139,641	151,457	172,637	190,709	185,947	175,137
第一次産業	428	497	633	1,430	1,422	1,440
第二次産業	49,634	51,829	54,450	56,457	47,650	39,235
第三次産業	89,579	99,131	117,554	132,822	136,875	134,462

<構成比>



資料：事業所・企業統計調査（H18）（長野市）
※5年ごとの調査による

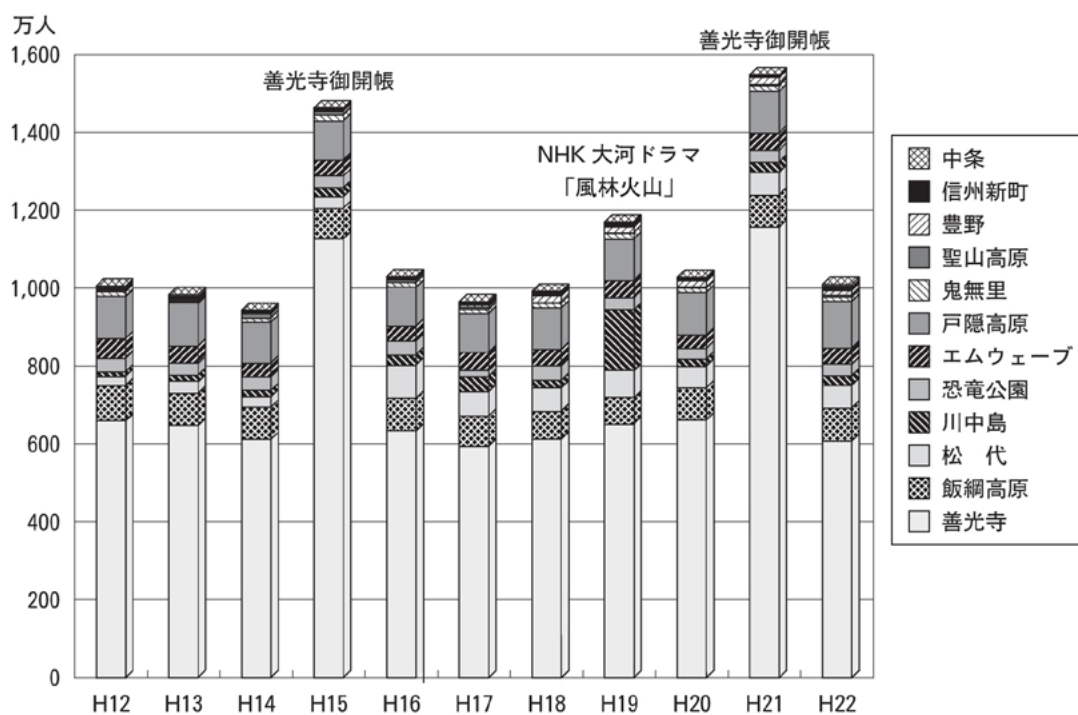
(3) 観光

善光寺とその門前町は、古くから信仰の中心として全国の人々に親しまれ、周辺に広がる宿坊・仲見世などが観光の中心として賑わいをみせている。とりわけ、数え年で7年に一度ごと開催される善光寺御開帳の年は、例年に比べて飛躍的に観光客が増加する。

また、真田十万石の城下町である松代は、当時の面影を残した歴史的建造物が数多く点在している。これら地域の観光資源を、住民自らが守り育てようと、「エコール・ド・まつしろ」（松代の文化財を活用した生涯学習プロジェクト）が取り組まれ、訪れる観光客をもてなしている。

さらに、戸隠・鬼無里をはじめとした地域は、豊かな自然環境の中に、古くから伝わる様々な歴史・文化・芸能があり、秘められた観光資源が残されている。

観光地利用客の推移



資料：長野市

(4) 交通

長野市は、明治4年(1871)以来、長野県の県庁所在地として発展を遂げ、官庁、金融機関、事業所などの都市機能の集積に伴い、活発な人的交流と情報が集中する中核都市として発展してきた。

本市と他地域を結ぶ交通機能は、善光寺門前に位置する長野市の中心市街地を中心に、道路と鉄道が整備されている。まず、道路については、長野市から名古屋市へ延びている国道19号と、群馬県高崎市と新潟県上越市を結ぶ国道18号が交わる交通の結節点となっている。また、市内南部松代地域には、東西に上信越自動車道が走っており、長野I.Cと市街地は、国道18号と主要県道によって接続されている。次に、鉄道については、平成9年(1997)10月にJR東京駅からJR長野駅間において長野新幹線(正式名称:北陸新幹線)が開通し、首都圏から訪れる観光客の利便性が向上した。さらに長野新幹線が平成27年(2015)3月に金沢駅まで延伸したことで、北陸方面からの観光客の利便性が向上し、名称も北陸新幹線(長野経由)に改められた。JR長野駅の在来線としては、長野県飯山市に繋がるJR飯山線、長野県松本市に繋がるJR篠ノ井線、長野県北佐久郡軽井沢町に繋がるしなの鉄道しなの鉄道線、新潟県上越市に繋がるしなの鉄道北しなの線があり、長野市と長野県下高井郡

山ノ内町を結ぶ長野電鉄長野線がある。なお、長野市南部の松代・若穂地域には、長野県須坂市と長野県千曲市を結ぶ長野電鉄屋代線が通っていたが、平成24年(2012)3月31日に廃線となり、代替バスの運行に切り替わっている。



3 歴史の変遷

(1) 長野盆地の黎明

長野市域における歴史の舞台への第一歩は、飯綱高原にある上ケ屋遺跡で、今から約2万年前の後期旧石器時代に遡る。上ケ屋遺跡の人々は、半径十数キロメートルを日常生活の領域として、その中を周回していたと考えられ、飯綱高原は湖沼の周辺に集まる動物たちと、それを追ってきた人々が生活の舞台とした場所であった。



飯綱高原（飯縄山と大座法師池）

12,000年前に最終氷期が終わると、落葉広葉樹が繁茂する湿潤なモンスーン気候に自然環境は変わり、豊かな森を舞台に縄文時代の狩猟採集の文化が展開する。戸隠地区の荷取洞窟からは、最古の縄文草創期の土器等が出土している。

千曲川河岸の地下4mからは縄文時代前期の集落が発見されており、縄文人が山間地から長野盆地の中州や自然堤防、扇状地に進出したことが確認されている。

弥生時代になると、千曲川の自然堤防上に集落、後背湿地を水田とする稲作農耕が始まる。稲作農耕の開始により社会の仕組みそのものが大きく変わり、ムラ同士の抗争も生まれ、ムラのまわりに大きな溝を巡らした環濠集落が出現した（千曲川右岸の自然堤防上の松原遺跡）。みのちましますいちげん水内坐一元神社遺跡では、環濠から彩色を施した盾が出土している。弥生時代後期には、千曲川流域にベンガラを塗って焼成した「赤い土器」が分布する地域色の強い「赤い土器のクニ」文化圏が形成された。弥生時代も終わりになると、ムラ長の墓おさが築造され、鉄製武器などが副葬されることから、武力を背景にした階層や当時の緊張関係を窺うことができる。



水内坐一元神社遺跡の盾
(復元模型)

(2) 長野盆地の首長層と政治的社会

古墳時代の前半期には、大和政権との繋がりを示す大型の前方後円墳（川柳將軍塚古墳や和田東山古墳等）が累代的に築造され、地域を治める「王」が存在し、広域の緩やかな地域的政治圏が形成されたとみられる。古墳時代中期後半代になると、前方後円墳の築

造は停止し、これと入れ替わるかのように積石塚古墳の築造がみられるようになる。大室古墳群では、約 500 基の古墳のうち 80% が積石塚古墳であり、全国的にも特異な合掌形石室が集中して構築されるなど、地域色が顕在化する。

古墳を築造する背景にあった集落としては、千曲川の自然堤防上にある篠ノ井遺跡群（古墳時代中期～後期）、榎田遺跡（古墳時代後期）や浅川扇状地の本村東沖遺跡（古墳時代中期）などの中核的集落と周辺の小規模集落という構造化が一層進む。

古墳時代中期後半代以降の変化は、「東山道」の整備による陸上交通路の重要性の増大や馬匹生産の展開等の社会背景、さらには国造制・部民制・屯倉等の中央政権の政策により、千曲川中流域を中心とする緩やかな政治圏・地域圏であった「シナノのクニ」が「科野」・「信濃」へと至

る過程を反映している。さらに、律令制下で誕生した「科野」・「信濃」は、その後、現在に至るまでほとんど領域変化がなく、古墳時代に形づくられた地域的政治圏がそのまま根底に継承されるという特筆すべき地域的特性を有している。

平安時代の『延喜式』によれば、信濃国は 10 郡から成り立っていた。長野盆地は更級・水内・高井・埴科の 4 郡で構成され、29 の郷があったと記されている。信濃の中で人口の集中する地域が更級郡であり、4 郡の中でも中心的な郡であった。

（3）中世への胎動

承和 8 年（841）の地震、仁和 4 年（888）の仁和の大洪水など 8・9 世紀の文献には幾度となく天候不順や自然災害が起こったことが書き留められ、近年の発掘調査でもその痕跡が確認されている。平安時代の 9 世紀には信濃各地の農村で耕地の荒廃や百姓の没落が進み、それまで村々をまとめてきた郡司は伝統的な権威のみで支配を続けることができなくなり、富裕者、新興有力者が台頭する。そうした有力者の郡政の請け負いが政府の政策としても推し進められた。8 世紀後半から 9 世紀初め頃に長野盆地で進められた条里水田の再開発などは、こうした郡司や新興有力者層を国衙こくがが組織して進めた事業であったのではないかと考えられている。南宮遺跡（篠ノ井東福寺）は、当時勢力を持ちつつあった有



和田東山 3 号墳竪穴式石室（若穂保科）



大室 168 号墳（合掌形石室）（松代町）

力者を中心とする集落であった。

飛鳥・奈良時代に国家的性格を持つ信仰としてはじめた観音信仰は、平安時代になると貴族層にも受容され、観音信仰を基盤にした霊場が形成された。清水寺（松代町西条）、観音寺（信更町）、正覚院（安茂里）、地藏院（若槻）のほか観龍寺（千曲市）、智識寺（千曲市）などには平安時代の観音像が残り、長野盆地でも平安時代に観音霊場が形成されたことが窺える。



平安時代集落の南宮遺跡調査（篠ノ井東福寺）

10世紀後半以降、末法思想が広まるにつれ、観音信仰の地に経塚が造られるようになる。平安時代の信仰が山への信仰を基盤にしており、北信濃における観音信仰や末法思想の広がりの中から善光寺や戸隠の信仰が生まれた。



北信濃の古代観音像・経塚及び社寺分布図（長野市立博物館 2003 より）

(4) 善光寺門前町の成立と発展

末法思想の広がりとともに、鎌倉幕府の善光寺保護政策により、治承3年(1179)に焼失した善光寺の再建が行われる。また、全国各地で有力御家人を檀那とした新善光寺を建立したり、善光寺仏を模造することがブームになり、鎌倉時代後期には全国各地に新善光寺が勧請され、善光寺信仰は全国に広がった。全国から善光寺への参詣人が増加するに伴って参詣路も発達した。『一遍聖絵』(正安元年(1299))、『遊行上人絵伝』(徳治2年(1307)までに制作)は、文永年間に再建された善光寺や門前の賑わいを伝えている。応永7年(1400)には「善光寺の南大門および裾花川の高島に履子を打つ所なし」(『大塔物語』)と門前の賑わいが記されている。

門前の住人は、大工・仏師・絵師・遊女・琵琶法師・絵解き法師など善光寺如来に直接結縁し世俗を脱した人々で、農村とは異なった町の世界が善光寺門前に展開していた。室町時代には、善光寺信仰と戸隠・飯縄信仰がセットになり、多くの参詣者を集めた。

(5) 松代城と城下町

戦国時代以降、北信濃は領地争奪の場となる。甲斐の武田信玄(晴信)は、北信濃攻略の前進基地として松代城(海津城)を築き、村上氏など国人領主は上杉謙信(長尾景虎)に救援を求めた。武田と上杉による「川中島の合戦」は、複数回にわたるが、永禄4年(1561)の合戦では、両軍合わせて少なくとも1,000人以上の戦死者が出たと推察される。川中島の合戦については、当時の確実な史料は少ないが、江戸時代以降、戦記物や浮世絵など多くの物語や絵図に記される。その内容には虚構や誇張も多く史実とは言い難いが、川中島の合戦に対する強い関心が庶民層に広く浸透していたことを窺わせる。

松代城には、武田氏の滅亡後は織田方の森長可が入り、織田氏の滅亡後は上杉方の村上、上条、須田、その後は豊臣方の田丸と短期間にめまぐるしく城主が代わった。この間、松代城主の政治的権限は強まり、北信四郡(高井・水内・更級・埴科)の中核としての機能が高まった。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、松代城には森長可の弟の森忠政が入り、二の丸・三の丸の整備が行われた。元和8年(1622)に真田信之が上田から移封されて以降、明治の廃城までの約250年間、松代城は真田氏の居城となる。

初代松代藩主信之の頃はまだ財政的に余裕があったが、江戸幕府からの厳しい課役に加え、度重なる災害によって財政は困窮を極めた。享保2年(1717)の火災では、城を全焼し、その再建のために幕府より1万両を借入れている。

文政6年(1823)に松代藩の8代藩主として真田幸貫が家督を相続すると、武術や学問の奨励や新たな殖産興業政策が展開される。松平定信の次男であり、真田家に養子として迎えられた幸貫は、藩の軍備を增強し、佐久間象山や村上英俊などの洋学知識を有する人材育成に力を入れ、文武学校の建設を進めた。また、養蚕・製糸業に対する本格的な保護政策も進められた。

(6) 善光寺信仰の広がり

善光寺は雷火や火災で何度も焼失し、寛文6年(1666)に如来堂(本堂)の仮堂が建てられたが傷みが進み、元禄5年(1692)から本格的な本堂再建計画が始まる。再建費用を賄うため、江戸・京都・大坂で出開帳を催し、どこでも大変な盛況であった。工事は、門前町から類焼しないように本堂を北へ移すこととし、新敷地を造成した。しかし、元禄13年(1700)に町家から類焼し、建築中の本堂も集積した用材も灰燼に帰した。

これまで善光寺が自力で進めてきた再建を危ぶんだ幕府は、自ら介入する形で再建を行い、元禄14年(1701)から宝永3年(1706)までの6カ年間、日本全国を回る回国開帳に踏み切り再建費用を集めた。工事は急ピッチで進み、宝永4年(1707)に落成した。

全国津々浦々の庶民にまで善光寺信仰が浸透したのは、各地で人々が熱狂的に群参した元禄・宝永の回国開帳を契機としてであった。以後、善光寺参りの男女が増大し、特に女性の多いことは善光寺参りの大きな特色である。東西南北から信濃へ入る道はすべて善光寺道となり、路傍に善光寺を指し示す道標が建てられた。

江戸時代後期になると、出開帳の完了、堂舎修復の完成、常念仏日数の区切りなどを機に、居開帳は江戸時代に15回行われ、回を重ねるごとに盛況となった。三寺中の院坊は信者を宿泊させ、本堂・諸道順拝や本堂のお籠もり、御印文頂戴などの世話をするとともに、全国各地に善光寺講を組織した。明和年間(1764～1772)頃には、諸国の檀那場を郡単位で院坊に割り振る持郡制もちごおりせいが定まった。

(7) 戸隠神社と戸隠信仰

善光寺と同じく、県内外へ広く浸透していった信仰に戸隠神社の信仰がある。現在の戸隠神社は、奥社、中社、宝光社、九頭龍社、火之御子社の五社からなるものの、このように神社を中心とした形に整えられたのは明治維新以降であり、江戸時代までは、戸隠山顕光寺を中心とした信仰が主であった。戸隠の歴史は古く、最も古い記録の『阿婆縛抄』あさばしりょうによれば、戸隠寺(現在の戸隠神社を指す)が、嘉祥2年(849)頃に学門行者によって開山されたとあり、また、『吾妻鏡』には、天台宗末寺としての顕光寺の名がある。そして、この戸隠山顕光寺が徐々に発展して整えられた、本院(奥院)、中院、宝光院からなる天台宗寺院が、江戸時代までの信仰の中心であった。さらに、戸隠は、そこに古くから農業神として庶民の信仰を集めていた九頭龍権現に代表される神道が一体化したため、多くの修験僧が修行に訪れる神仏混淆の聖地としても栄えていた。そして、慶長以来続いてきた天台宗の僧は、明治維新の廃仏毀釈によって還俗して神職となり、神社に奉仕する形となって今に至っている。また、戸隠神社には、江戸時代以前から、多くの参拝者が信濃国内外から訪れていたために、四方八方から戸隠へ通じる信仰の道が延びている。とりわけ、善光寺から戸隠に通じる表参道は、双方を参拝する参詣者が通るために、最も多くの人々が往来した信仰の道であった。

(8) 北国街道と交通運輸

江戸時代の主要街道は、江戸日本橋を起点とする五街道とそれに次ぐ脇街道があり、長野市域には脇街道の一つ北国街道（北国往還）が通っていた。北国街道は、江戸から来ると中山道追分宿（軽井沢町）で分岐し、小諸、上田、坂木（坂城町）の各宿を通り、矢代宿（千曲市）を過ぎて二つに分かれる。一つは矢代の渡しで



江戸時代における北信濃の街道

千曲川を渡り、丹波島宿から市村の渡しで犀川を越え善光寺宿から牟礼宿（飯綱町）に至るルート、もう一つは松代城下を通り、福島宿（須坂市）北の布野の渡しで千曲川を渡り長沼宿から牟礼宿に向かうルートであった。後者が戦国時代から江戸時代初期の主要道で、上杉景勝が川中島平に進出するために整備



善光寺宿（『善光寺道名所図会』）

した軍事目的の強い道であり、長沼城と松代城を結んでいた。

慶長 16 年（1611）に北国街道の宿駅の設定が行われたとき、松代道とともに善光寺道の道筋も公認され、次第に繁栄する善光寺町を通る街道が主となっていった。松代道は主に犀川の洪水による舟留めの時に迂回路として利用されたので、「雨降り街道」とも呼ばれた。

北国街道は、善光寺や戸隠へ参詣する「信仰の道」、佐渡で産出した金・銀を江戸や駿府に送るための「佐渡金山の道」、加賀藩前田家や松代藩真田家などの「参勤交代の道」として用いられた。

18 世紀以降、木綿や菜種に代表される商品作物の生産が増大するにつれ、手馬・中馬

などによる輸送が行われ、商品流通が活発になっていった。

江戸時代の物流を陸上交通とともに担ったのが河川による舟運であった。人や牛馬とは比較にならないほど1回で大量・安価に物資を運ぶことができるため、大川では通船が往来した。千曲川通船は、寛政2年(1790)に許可を得た西大滝村(飯山市)の太左衛門が西大滝から福島宿まで、文化14年(1817)には松代藩が通船営業に乗り出し、松代から福島宿まで、天保12年(1841)には善光寺後町の商人厚連が丹波島から西大滝まで運航した。

犀川通船は、天保3年(1832)に筑摩郡白板村(松本市)の折井儀右衛門らが新橋(松本市)から新町村(長野市信州新町)まで運航を始めた。

(9) 山間地交通の要路鬼無里

鬼無里^{きなし}は、長野市の北西部、戸隠地区の西部に位置し、犀川の支流裾花川上流域の鬼無里盆地を中心に広がる中山間地の地区であり、川沿いの沖積地と河岸段丘の平地、大部分の面積を占める山地とで構成される。標高は670mから1,562m(一夜山^{いちやさん})にあたる。この鬼無里盆地の中央に町^{まち}の集落があり、行政経済の中心地である。

近世から近代にかけて、麻の栽培が盛んに行われ、副業として畳糸の製造が行われた。麻は農家経済の大半を担っていた主要な産業であった。

鬼無里地区は、遷都伝説^{きじよもみじ}、鬼女紅葉伝説や木曾義仲に因む伝承を残し、遷都伝説に因む東京^{ひがしきょう}、西京^{にしきょう}といった集落がある。地区内には奥裾花溪谷(県名勝)やミズバショウの大群落がある。平成17年(2005)に長野市に編入合併し、現在に至っている。

江戸時代の鬼無里は、松代往来、戸隠往来、安曇往来、高府往来、早川道などが町や西京などを分岐点として各地へ通じていた。

松代往来は、町から瀬戸を通り、東方に向かい、戸隠・七二会^{なにあい}を経由して途中安茂里で犀川を舟で渡り、さらに千曲川を舟で渡って松代まで約8里であった。

戸隠往来は、主として戸隠山参拝と食糧補給と物産移出に重要な街道であり、町から小川に沿って、高橋・大望峠を通して宝光社に至る道が主要な往来であった。

安曇往来は、町から祖山、十二平、大久保、西京、落合、柄山峠を越えて、糸魚川街道と合流する。西京で分岐して府成、田之頭、押切、嶺方峠(白沢峠)を越えて、糸魚川街道へ通じる最短ルートもあった。

高府往来は、町から大洞峠を越え、小川村の日本記、高山寺、成就を経て、大町街道に合した。

西京から北に土倉、小佐出、奥裾花を経由して越後の北陸街道梶屋敷宿へ通じる早川道は、西京から南へは十二平から分岐南下して、法地・埋牧・馬曲等を経由して落合で大町街道に通じていた。

高府往来、早川道が南下して合流する大町街道は、長野から大町方面に通じる道であり、長野からは大町街道、大町方面からは善光寺街道と呼ばれる。長野からは裾花川を渡り、



江戸時代の主なる往来（『信越古道』信越古道会 2010 を改編してリライト）

犀川沿いを西に進み、七二会地区から土尻川沿いに中条、高府、千見を經由して大町に至る上水内郡、北安曇郡の山中を東西に走る道筋である。

これらの道を通して、麻、畳糸、鬼無里紙等が移出され、塩・米・酒・魚等を移入するなど人と物資が行き交った。鬼無里は、村内外の商人の交易の場として、近郷では例のない「九齋市」(1ヶ月に9回開かれた定期市)が開かれた。市は今の町区において天和3年(1683)に開設が許可され、当初は六齋市(1ヶ月に6回開かれた定期市)であったが、安永9年(1780)には「九齋市」になった。市日は1・2・8の日であり、取引された商品の大半は麻であった。現在でも町区で7月15日から1週間執り行われている祇園祭は、九齋市の名残であり、市の神や津島午頭天王に奉納する祭屋台が伝承されている。古老の言い伝えによると「町から小鬼無里まで峯山づたいの古道に、仮設店舗がたくさん明かりを灯して賑やかだった」という。

松代往来、戸隠往来、早川道などの道は、北国街道や脇街道の公街道的性格に対し、庶民が開いた生活の道であった。信州では、江戸時代中期になると貨幣経済が発達して、商品作物の生産が盛んになり、物資と人の移動のために山間部にも新たな道が次々と開削された。これらの道は、民間の商品輸送のための道であり、戸隠や善光寺へ詣でる道でもあった。

戸隠往来などの道は山越えの踏み分け道であったが、長野と鬼無里を結ぶ裾花溪谷沿いの道は両岸が険しいために中々開けず、天保の頃から道の工事に手がつけられ、弘化・嘉永の頃には一通り開通したようである。白馬と長野を結ぶ道路は、改修を重ねて明治21年(1888)に柄山峠を越え、旧北城村森上に至る道路が竣工となった。その後、明治32年(1899)には柳沢峠経由、昭和14年(1939)にはさらに嶺方峠(白沢峠)経由と路線が変更され、現在のような道路になったのは、昭和40年代である。

(10) 長野の近代化

幕末期の長野市域は、松代藩領と椎谷・飯山・上田・須坂の各藩領、幕府領、塩崎地行所、善光寺領などがあり、入り組んだ支配となっていた。慶応4年(1868)1月の鳥羽・伏見の戦いからはじまった戊辰戦争は、北信濃では飯山戦争等を経て、明治4年(1871)7月に廃藩置県が断行される。松代藩は松代県となり、11月の府県制3府72県の再編制による東北信6郡を管轄する長野県に編入される。さらに、明治9年(1876)8月には筑摩県の中南信4郡を合わせて、旧信濃国10郡が長野県となる。

善光寺のある長野村には、明治維新とともに明治4年(1871)6月に県庁(西方寺)が置かれて、県都となり、市街の近代化が急速に進められた。明治22年(1889)の町村制で長野町は地方自治体となり、明治30年(1897)には市制を施行して長野市となった。

明治21年(1888)の直江津線長野駅の開業、明治26年(1893)の高崎・直江津間鉄道全通、明治35年(1902)の篠ノ井線(篠ノ井・塩尻間)の開通と明治44年(1911)の中央線全通によって、善光寺と県庁、長野駅周辺の幹線沿いは近代的市街地が形成された。

鉄道の開通により貨物輸送量が急速な増加となり、商品流通が活発化し、商工業を発展させた。

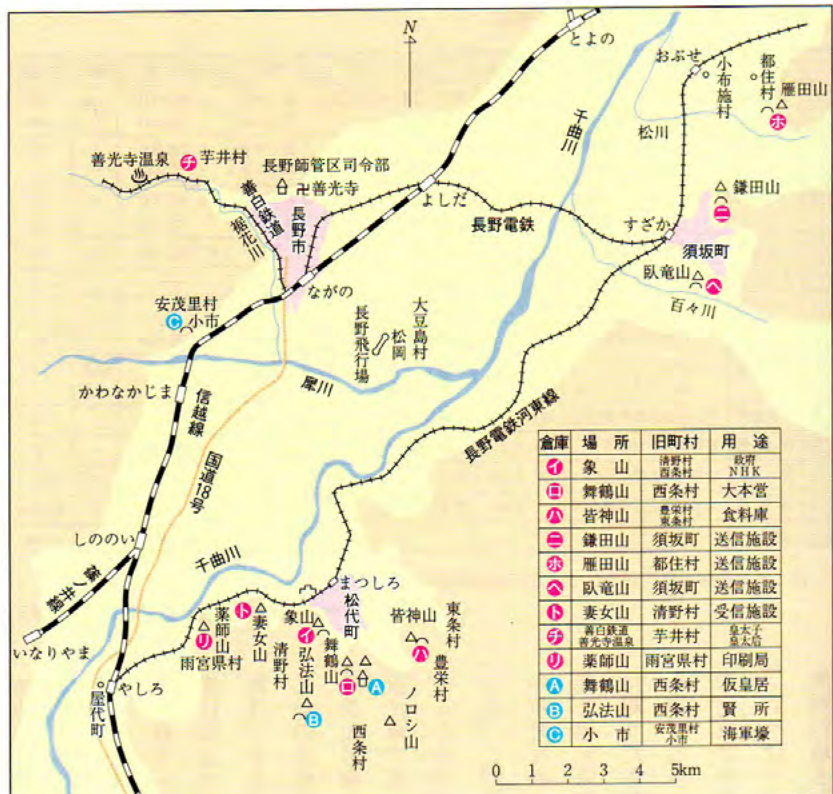
大正12年(1923)7月に、近隣の三輪村・芹田村・吉田町・古牧村の1町3村が編入合併して市域を広めた。これは大正8年(1919)4月に制定された「都市計画法」による都市計画に基づくもので、昭和2年(1927)には安茂里・大豆島の2村を加えて都市計画区域を設定した。実施計画の作成に当たり、これまでの仏都中心から遊覧都市中心へと基本方針を位置付け、商工業地域を設定する案を作成し、昭和5年(1930)6月に事業は認可となった。



長野駅開業時の長野停車場（左側の平屋）
（扇屋引札の一部／長野市立博物館／明治時代中期）

大規模敷地を要する官庁、文教施設は市街地縁辺部に設置され、市街地（特に現在の中央通り、善光寺への参道）との連絡道路が建設されることで新しい町が生まれ、近世までの善光寺への参道（南北軸）が明治以後においても都市軸を強く既定して市街地が拡大した。

千曲川の右岸である河東地域の人々は、鉄道線からはずれて生活や地域の発展の上で大きな不安と焦りを感じていたが、大正11年(1922)に河東鉄道の屋代・須坂間、大正15年(1926)に権堂・須坂間、昭和3年(1928)には長野駅まで開通し



松代大本営関係施設（『松代大本営 歴史の証言』より）

た。昭和4年(1929)秋に発生した世界的大恐慌により、糸価・繭の価格が暴落し、養蚕農家に深刻な影響をもたらした。農家の窮状を救済するため、市による公共工事や県による不況対策が実施されたが、蚕糸業は急速に衰退をたどった。経済的危機に遭遇した蚕糸業の打開のために、国策である満州移民政策が進められた。長野県の満州移民への取り組みは、昭和11年(1936)には具体化し、昭和20年(1945)までに長野市からも入植している。

昭和12年(1937)7月に日本と中国は戦争状態に突入し、防護団、婦人会・青年団・警防団などが結成され、勤労働員が行われた。昭和16年(1941)8月、太平洋戦争が勃発すると極度に物資が不足し、戦時下の耐乏生活を余儀なくされ、市民生活は悪化の一途をたどった。太平洋戦争の末期、昭和19年(1944)11月には、松代町の象山、舞鶴山、皆神山などに大本営とその関連施設の地下壕掘削工事が軍部により行われ、昭和20年(1945)8月の日本の敗戦により、未完成で中止された。8月13日には、アメリカ軍による空襲があり、長野市内各地で死亡者の発生や家屋焼失など大きな被害を受けた。

(11) 戦後の長野

昭和20年(1945)の敗戦以降、物資不足・インフレ・人口増等の社会的状況の変化が現出するとともに、義務教育六三制の実施、新制高等学校への移行、信州大学の発足や市町村消防、自治体警察、公民館設置、生活改善、保健福祉などの体制整備が行われた。しかしながら、自治体財政の窮迫から更級郡篠ノ井町周辺(昭和25年(1950)7月)、埴科郡松代町周辺(昭和26年(1951)4月)では、合併が行われた。さらに、昭和28年(1953)9月には「町村合併促進法」が公布され、上水内郡・更級郡・埴科郡のほとんどの町村で合併が進められた。昭和31年(1956)6月には「新市町村建設促進法」が公布され、昭和34年(1959)4月に上高井郡では若穂町、5月には篠ノ井町と塩崎村の合併による篠ノ井市が設置された。昭和41年(1966)3月には「市町村合併特例法」が施行されると、昭和41年(1966)10月に2市3町3村(長野市・篠ノ井市・松代町・川中島町・若穂町・更北村・信更村・七二会村)の大合併が成立した。

昭和30年代から40年代の高度経済成長期には、中心市街地での百貨店の開業、物流基地の整備(青果水産物市場団地、長野卸センターなど)、工場誘致や工場団地の設置に力が注がれた。好景気による都市部の商工業化の進行は、農山村からの大量の賃金労働者を都市へ集めることになり、第2種兼業農家の増加、第1次産業人口の低下をもたらし、農山村の過疎化を招いた。

自然災害では、昭和40年(1965)から松代群発地震が発生し、有感を加えた地震総回数は64万8,000回を数え、昭和44年(1969)には終息状態に至った。風水害では、台風による犀川や千曲川、その支流の堤防決壊などで農地や家屋の被害を度々受けた。昭和60年(1985)の「地附山地すべり災害」では、26人の犠牲者と多くの住宅被害を出した。

昭和40年代の後半から、「まちづくり」という言葉が盛んに使われるようになり、市民

参加による祭り、歩行者天国、野外彫刻の設置など心の豊かさや地域の活性化を目指したまちづくり運動が動き出した。昭和50年代に入ると、大がかりな都市基盤整備事業や土地区画整理事業が相次いで実施され、市街地や郊外でのまちなみ景観や交通・商業事情は大きく様変わりした。

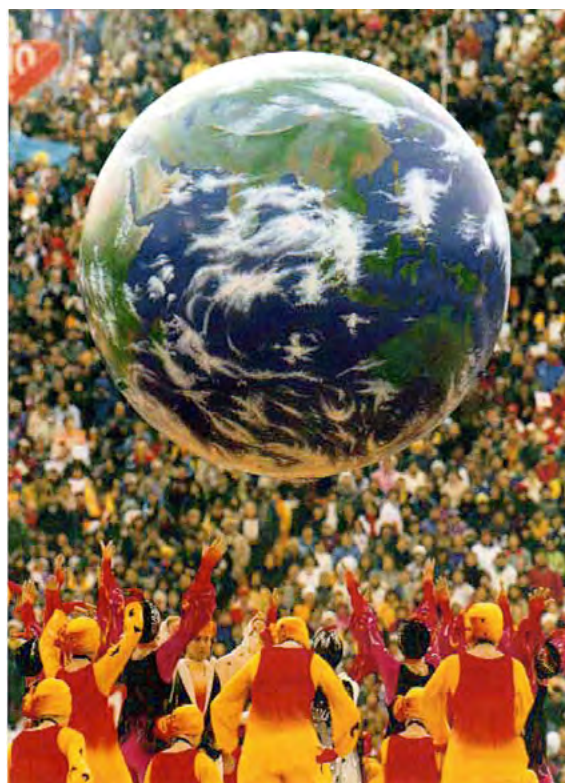
一方、農村部では、昭和30年代半ばから農業人口の減少や高齢化が進み、村おこしの必要が叫ばれ、地域活性化のための産直交流、特産品栽培、農産物のオーナー制度など様々な試みが行われた。

昭和40年代からの自動車の普及に伴い、中心市街地の空洞化は急激に進み、大型店の多くは郊外に新設されるようになる。マイカー時代になると、自動車道の早期着工の要請が強まり、昭和56年（1981）3月には、中央自動車道の諏訪ルートが完成したため、長野線の早期開通が待たれることになった。昭和61年（1986）から、高速道用地の松代町松原遺跡、若穂川田条里遺跡などの緊急発掘調査が始まり、平成5年（1993）3月に長野自動車道・上信越自動車道（豊科I.C（現：安曇野I.C）から須坂長野東インターまで）が開通した。平成8年（1996）11月には、更埴ジャンクションから藤岡インターまでが開通した。

平成3年（1991）6月15日に第18回オリンピック冬季競技大会（平成10年（1998））の開催都市が長野市に決定したことで、新幹線の早期実現が不可欠となり、平成9年（1997）10月に長野新幹線が開業した。平成10年（1998）2月、20世紀最後の冬季オリンピック競技大会が16日間にわたって長野市を中心とする5市町村を会場に開催された。3月にはパラリン



地附山地すべり災害（昭和60年（1985））

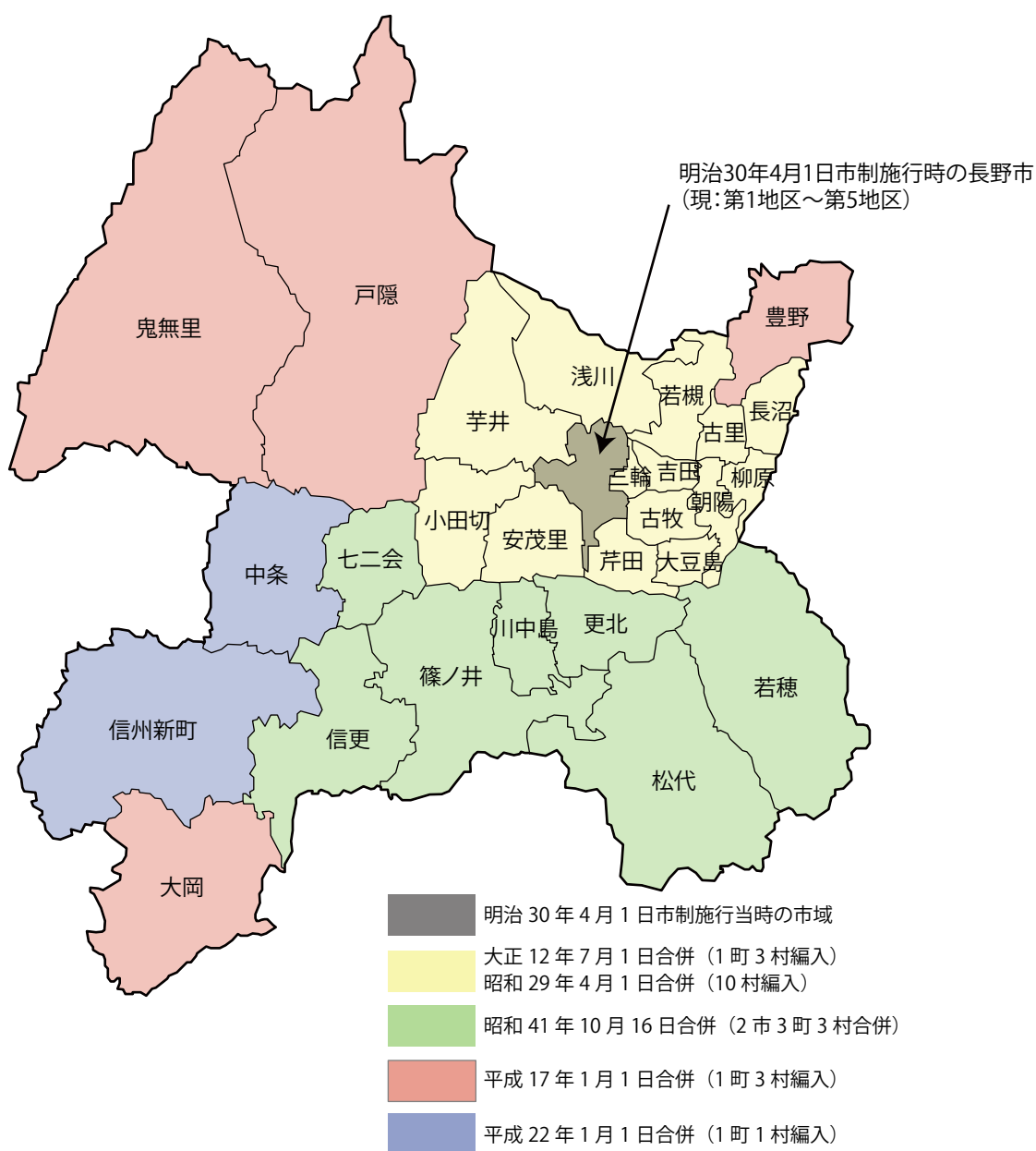


世界はひとつー平和への願いを込めた長野冬季オリンピック開会式（『公式報告書』より）

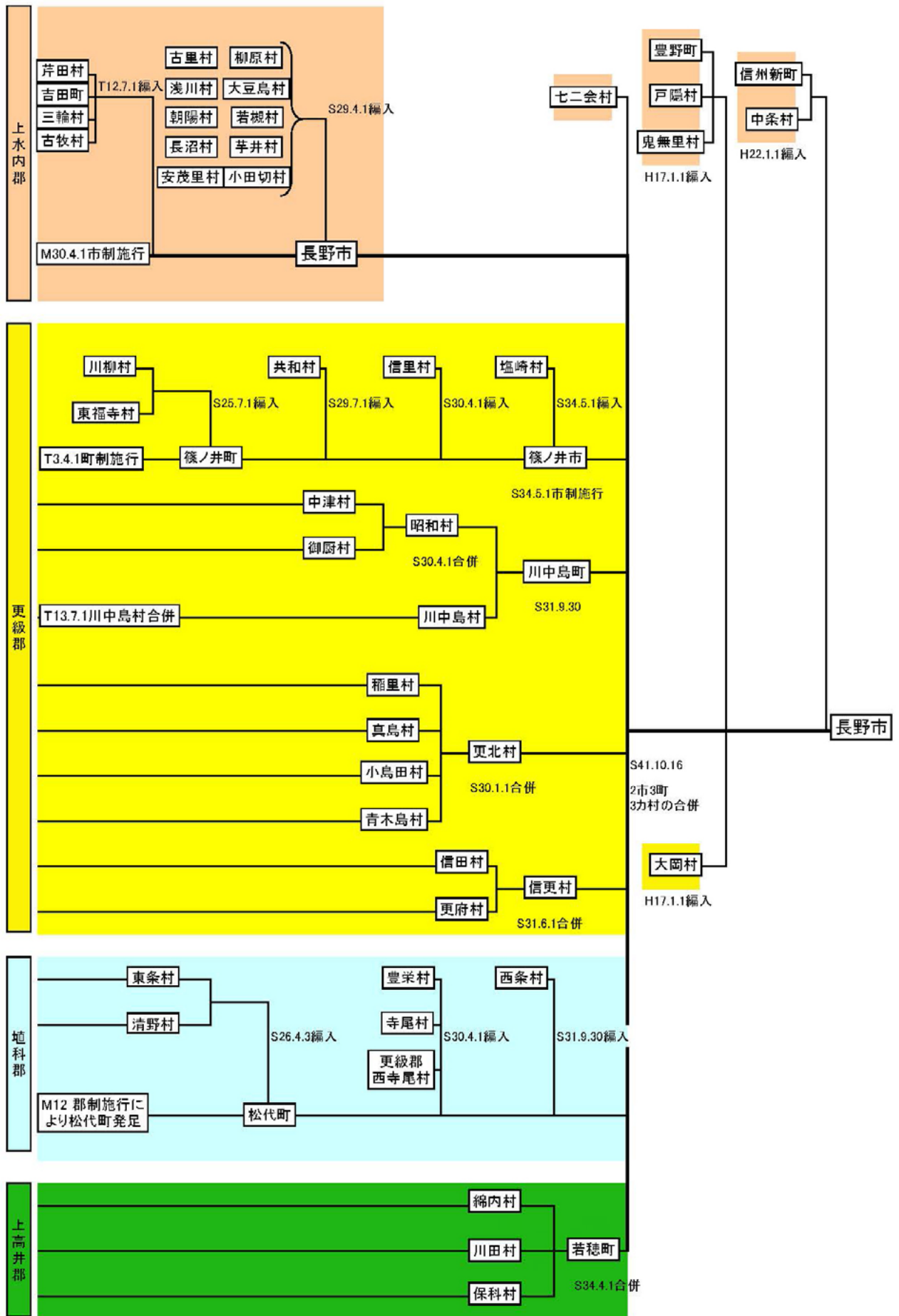
ピック冬季競技大会が10日間にわたって開催された。平成17年(2005)2月から3月には、第8回スペシャルオリンピックス冬季世界大会が開催された。

オリンピック後の長野市では、オリンピック競技施設の充実、大都市圏との時間的短縮により、国際会議観光都市として、様々なコンベンションが誘致・開催されている。

平成元年(1989)12月の国の「地域中核都市」構想を踏まえて、長野市は平成11年(1999)4月に中核市に移行した。また、国が打ち出した「平成の市町村合併」に際し、平成17年(2005)1月に1町3村(豊野町・戸隠村・鬼無里村・大岡村)、平成22年(2010)1月に1町1村(信州新町・中条村)の編入合併を行い、現在に至っている。



現在の長野市域と市町村合併の経緯



合併・編入の変遷

(12) 長野市の歴史に関わる主な人物

さなだのぶゆき

真田信之 永禄9年(1566)～万治元年(1658) 武士・松代藩初代藩主

真田昌幸の長男として永禄9年(1566)に生まれた。父と共に上信両国に出陣し、真田の武功を誇った。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて、父昌幸、弟信繁(幸村)と袂を分けて、徳川方につき、家名を残すことに成功した。以後、慶長5年に上田城主、元和8年(1622)に松代城主となり、真田十万石の基礎を築いた。

墓は松代町長国寺と隠居所であった松代町柴大鋒寺にあり、松代藩の藩祖として、松代町西条白鳥神社に武靖大明神として祀られている。



つかだたいほう

塚田大峯 延享2年(1745)～天保3年(1832) 医師・儒学者

善光寺桜小路(現長野市桜枝町)の医者で、室鳩巢の門人でもあった塚田善助(旭嶺)の子。母千賀子は松代藩士矢島氏の娘。名は虎、字は叔貌、通称は多門。はじめ父について学び、16歳で江戸に出て苦学し、漢学塾を開く。寛政2年(1790)の寛政異学の禁のとき、これに反対し、市川鶴鳴・山本北山・亀田鵬斎・泉豊洲とともに五鬼と称される。文化8年(1811)、尾張藩儒、のち藩校明倫堂の督学となり、88歳で没するまで教壇に立った。長兄の明は松代藩士の家を継ぎ、次兄道有は医者として一茶の『父の終焉日記』にも名が見える。末弟の慈延は、比叡山の僧となり、隠居後京都に住んで歌人として名をなし、澄月、小沢蘆庵、伴蒿蹊とともに、平安和歌四天王と称された。



もろなにまる

茂呂何丸 宝暦11年(1761)～天保8年(1837) 俳人・俳学者

吉田村北本町(現長野市吉田3丁目)に小沢治郎右衛門の長男として生まれ、青年時代は書画を愛し、江戸・京都・大坂を往来し、古書画の売買を業としていた。寛政4年(1792)に俳諧の仲間入りをし、享和2年(1802)に重病を患い、剃髪して「何丸」と名を改める。文政2年(1819)江戸に出て蔵前の札差中村抱義の知遇を受け、俳諧宗匠として立つ。松尾芭蕉の研究で知られ、芭蕉七部集注釈事業に取り組み、『七部集大鏡』や『芭蕉翁句解参考』を著している。文政7年(1824)、京都二条家から「俳諧奉行職御代官」に任じられている。名は一元、通称治郎右衛門、別号に古連、漁村、月院社がある。



みねむらしくはさい
峯村白齋 安永元年（1772）～嘉永4年（1851） 俳人

水内郡石村（現長野市豊野町石）の豪農峯村藤兵衛の長男として生まれ、幼名は清蔵、後に仙蔵といった。早くから俳諧に親しみ、善光寺町の戸谷猿左に学び、茂呂何丸、小林一茶らと交遊した。また石村長秀院の発明和尚に漢学を学び、南画も能くした。「俳句手帳」・「花の俳」などの発句集があり、俳文集として『四景楼之辞』などがある。別号は、古扇、古仙、古僊、寒岳園。後に白齋と称した。寺子屋「寒岳園」を営み、これを庵号とした。

かんばらとうざん
鎌原桐山 安永3年（1774）～嘉永5年（1852） 朱子学者・故実家

松代藩の家老・鎌原重義の三男として生まれた。名は重賢、のち8代真田幸貫から一字を賜り貫忠、号を子恕と改める。

桐山は、岡野石城、佐藤一斎に儒学を学び、長国寺住職・千丈実巖に詩文を学んだ。射術、馬術、卜伝流槍術、長沼流兵学、小笠原流礼法、点茶など諸芸を極めた。門人に山寺常山、佐久間象山、長谷川昭道らがあった。詩作、文章もたしなみ、その蔵書は1万冊にのぼったとされる。著作に『朝陽館漫筆』150巻余、『隠居放言』14巻、『大東鈴家智囊』などがある。没後門人等によって松代・東条に碑が建てられ、碑文は佐藤一斎が記している。



さなだゆきつら
真田幸貫 寛政3年（1791）～嘉永5年（1852） 武士・松代藩8代藩主

信濃守。号は遂翁、一誠斎。陸奥白河藩主松平定信の二男で、真田幸専の養子となり、文政6年（1823）家督を継ぎ、10万石を領する。藩政改革を実施し、特に富国強兵策を採用し、藩士佐久間象山を抜擢して、洋学や西洋砲術の研究、洋式大砲、鉄砲の鑄造、殖産興業などを推進した。天保12年（1841）、幕府老中に登用され、海防掛として、諸侯に海岸防御のために大砲を鑄造することなどを命じる。弘化4年（1847）の善光寺大地震では、幕府より1万両を拝借した。嘉永5年（1852）、藩校文武学校の建築準備に着手後、62歳で没した。



てらしまそうはん

寺島宗伴 寛政6年(1794)～明治17年(1884) 和算家

上水内郡鬼無里村(現長野市鬼無里)に生まれ、はじめ宮城流和算の叔父寺島半右衛門陳玄について学び、文化13年(1816)に免状を得る。その後松代藩士町田源左衛門正記について最上流和算を学び、文政10年(1827)に免状を取得。鬼無里を中心に信濃を遊歴し、門弟衆には信濃から越後にかけて1,100人を越える門弟の名が記されている。和算以外にも家相、規矩術、そろばん、折形、挿花も教授した。鬼無里松巖寺に奉納算額が残されている。『算法続浅問答』、『算法隔日記全二十卷』などがある。通称は数右衛門、号は北明。



いわしたさだあき

岩下貞融 享和元年(1801)～慶応3年(1867) 国学者

善光寺大門町(現長野市大門町)の素封家岩下貞諒の長男として生まれる。文政2年(1819)、名古屋へ行き、塚田大峯に師事する。また京都で頼山陽に詩文を、江戸で清水浜臣に国学を修め、和漢の学に通じ、詩歌書画を能くした。善光寺大勸進別当に仕える寺侍で、和歌・詩文・国学関係の出版物のほか善光寺についての初の研究書『善光寺史略』、『善光寺別当伝略』などを著した。雅楽を奏する楽人でもあった。近世善光寺町を代表する学者で、本姓は滋野、通称は多門、号は桜園、菅山。名は「さだみち」とも言う。

あおきせつけい

青木雪卿 文化元年(1804)～明治34年(1901) 武士・絵師

現在の長野市松代町岩野に生まれる。通称八重八、号を雪卿とした。川中島の更級雄斎に絵を学んだとされる。松代城の障壁画を描き、多くの肖像画を描いたと伝えられる。

弘化4年(1847)に起こった善光寺地震後の被災地を、8代藩主真田幸貫の巡行どおりに描いた『感応公丁未震災後封内巡視図』は、被災地を写實的に描いた彼の代表作であり、災害史の重要な記録である。パノラマ写真のような眺望図や、实景を尊重する極めて写實的な表現は、写真の影響を想像させるような、新しい表現が見られる。

やまでらじょうざん

山寺常山 文化4年(1807)～明治11年(1878) 武士・儒学者

通称は源太夫、号を常山といった。松代藩160石取りの武士の家に生まれ、藩の監察、普請奉行を経て、江戸で兵学、経学などを学び、佐藤一斎や中村敬宇らと親交を深めた。8代藩主真田幸貫が老中となると、藩士に兵学を講じ、9代幸教の代には側役頭取を兼ねた。また、寺社奉行や郡奉行を勤めた。明治維新後は、明治政府の招きを固辞して松代に留まり、晩年は長野に塾を開いて門人の教育にあたった。屋敷地は山寺常山邸として松代町竹山町に現存し、庭園が登録記念物(名勝地)に登録されている。



さくまぞうざん

佐久間象山 文化 8 年 (1811) ~ 元治元年 (1864) 武士・儒学者・兵学者

松代藩の下士佐久間家の長男として、埴科郡松代町浦町（現長野市松代町松代）に生まれる。通称は修理、号を象山・子明。儒学を学び、朱子学を信奉する。天保 4 年（1833）、江戸に出て佐藤一斎に学び、その頃渡辺崋山、坪井信道、藤田東湖らと交わり、親交を深めた。アヘン戦争（天保 10 年（1839）～天保 13 年（1842））の衝撃を受けて対外的危機感に目覚め、天保 13 年（1842）、8 代藩主真田幸貫が老中海防掛となると、海外の事情を積極的に学んだ。弘化元年（1844）、黒川良安と蘭学・漢学の交換教授を行い、その後オランダ語の百科事典などによって新しい知識を身につけ、様々な科学実験を行った。天保 13 年（1842）、江川英龍に入門して西洋砲術を学び、嘉永 3 年（1850）、江戸深川で西洋砲術の塾を開いた。弟子に、勝海舟、坂本龍馬、吉田松陰らがいる。安政元年（1854）、吉田松陰のアメリカ密航未遂事件に連座し、松代に蟄居を命じられる。元治元年（1864）、幕府の命を受け、海陸御備向手付御雇として京都に上るが、7 月 11 日三条木屋町で尊攘派によって暗殺される。享年 54 歳。



はせがわあきみち

長谷川昭道 文化 12 年 (1815) ~ 明治 30 年 (1897) 武士・皇道学者

通称を深美といい、号を戸隠舎といった。藩の竹内錫命・鎌原桐山・山寺常山らに漢学や兵学を学び、江戸で佐藤一斎に師事した。郡奉行兼勝手元締役などを務めた。一貫して尊皇攘夷を唱え、佐久間象山らの派閥と対立した。慶応元年（1865）京都留守居役となり、明治維新にあたっては、政府より教道局御用掛として大学創立の調査に当たり、太政官権大史に任ぜられた。明治 3 年（1870）、農民一揆の松代午札騒動が起こると、旧藩主真田幸民の強い要請で官を辞し、松代に帰って騒動の收拾に当たった。大正 4 年（1915）正五位を贈られた。維新时期に藩論を勤皇に統一し、著書に『皇国述義』、『神皇正統記譜略』などがあり、真田公園に顕彰碑が建っている。



きたむらきよまつ

北村喜代松 天保元年 (1830) ~ 明治 39 年 (1906) 彫工

頸城郡市振村（現新潟県糸魚川市市振）の宮大工建部家に生まれ、上水内郡長野村（現長野市）の北村家に入婿した。喜代松は、早くから鬼無里に来て、屋台の彫刻などを手がけた。結婚後 15 年間余り上水内郡長野町（旧長野市）に住み、47 歳の明治 9 年（1876）に故郷の市振村へ移る。喜代松の手による作品は、長野市内では鬼無里の屋台や神楽彫刻、戸隠神社宝光社の拝殿彫刻、市外では飯山市、野沢温泉村などの本堂彫刻、新潟、富山、群馬の本殿・拝殿など彫刻 30 余りが残されている。

おおさとちゅういちろう

大里忠一郎 天保6年(1835)～明治31年(1898) 製糸家

埴科郡西条村(現長野市松代町西条)の旧家相沢家に生まれ、松代藩士大里家の養子となる。士族授産のため製糸業に着目し、官営富岡製糸場を模範として明治7年(1874)に日本初の民間蒸気製糸工場(西条村製糸場、後の六工社)を有志と共に設立した。資金の乏しい中、研究・改良を重ねて蒸気汽罐や陶器の繰糸鍋を発明し、上質の生糸を生産して製糸業の発展に努めた。西条村製糸場は民間蒸気製糸の工場として全国の模範となった。富岡製糸場にて製糸技術を学んだ和田英は、西条村製糸場の事業開始とともに富岡製糸場を退場し、指導者となる。



明治11年(1878)には長野県御用掛を命じられ、県の設立した製糸場の主務を努め、六十三国立銀行を創設して支配人兼副頭取となった。明治21年(1888)には、松代町に蚕糸業伝習所を新設し、学理的な研究と一切の実務的技術を習得させて、後進の育成に努めた。明治23年(1890)六工社の生糸が、パリで開かれた万国博覧会で金牌を受賞した。その後、全国各地で講演を行い、日本の製糸業の優秀性を訴え、その振興を図った。また、六工社の生糸のアメリカへの直輸出の道を開くなど、製糸家として活躍した。

わだえい

和田英 安政4年(1857)～昭和4年(1929) 工女

英は、安政4年(1857)に、横田数馬・亀代の二女として松代町代官町に生まれた。明治6年(1873)、松代地方の工女を引き連れ、16歳で上州官営富岡製糸場に入場。フランス式繰糸技術を伝習。一等工女となって帰郷。明治17年(1884)に、松代西条村の日本最初の民間蒸気製糸場、西条村製糸場(後の六工社)の教婦としてその創業に尽力した。後年、明治41年(1908)から大正2年(1913)にかけて、富岡製糸場の生活や六工社創立当時を追想し、『富岡日記』を執筆。当時の新しい女性の生き方が映し出された貴重な記録となっている。明治44年(1911)には『吾が母の躰』を著した。



生家である横田家は、敷地と建物のほぼ全てが現存し、松代藩中級武士の生活の様子を偲ぶことができるとして、重要文化財に指定され、一般公開されている。

ふじわらぜんくろう

藤原善九郎 明治3年(1870)～大正12年(1923) 煙火師

杜煙火の盛んな上水内郡安茂里村(現長野市安茂里)に生まれる。同村平柴に信濃煙火合資会社を設立し、24歳のときに北信地区花火師組合を発足させ、大正4年(1915)には長野県煙火組合を創設して組合長になる。この組合の事業として『煙火之研究』を発行し、長野県花火師の仲間の中心、指導者として活躍した。この組合には73名の会員が参加したが煙火の需要が多くなく、農業との兼業をする半農半工が大多数であった。花火技術の改良に取り組み、初めて打ち上げ花火に色をつけ、また初めて尺玉の打ち上げに成功した。明治43年(1910)3月には、名古屋で開催された第10回関西府県連合共進会に2尺玉を出品した。

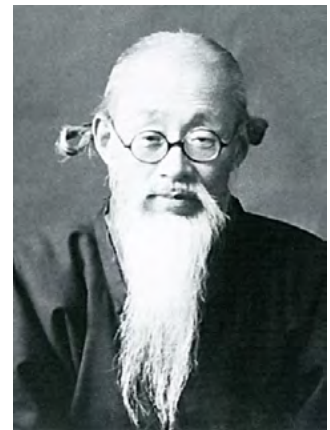


ながおかすけじろう

長岡助治郎 明治4年(1871)～昭和14年(1939) 教員・郷土史家

明治25年(1892)松代尋常小学校専科教員(音楽科)となり、以来教員として50年間勤務した。この間、文武学校の改築には、文武両道の精神を受け継ぐ松代の象徴であり、貴重な文化財であることを主張し、改築話を中止させた。松代雅楽は、8代藩主幸貫の時代から武家の式楽として松代城下でも始められ、明治維新後中断していたものを、宮島春松らと協力して復活した。

松代大門踊りは、江戸時代の祇園祭の際、藩や藩主の弥栄を祈って、松代城大御門前で踊られていたが、廃藩後絶えていたものを、開府300年祭(大正10年(1921))の挙行に際し、助治郎の指導のもと肴町の青年等により復活した。

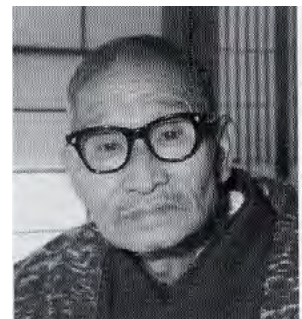


かわむらまきざん

川村驥山 明治15年(1882)～昭和44年(1969) 書家

静岡県袋井市に漢学者東江の長男として生まれる。幼い頃から書と漢詩を父川村東江や太田竹城、岡田良一郎に学び、11歳のころには、明治天皇の銀婚式に「孝経」と「出師表」を韻書して献上し、天覧の栄を賜る。幼年より全国各地の素封家の間を筆一本を持って歩く、文人墨客的な生活を送る書家であった。

昭和20年(1945)の東京大空襲により、戦禍を避けて篠ノ井に疎開することとなり、居宅を新築するなどして信州に永住する決心を固める。昭和37年(1962)には支援者により常設展示を目的とする「財団法人驥山館」が開館する。



飄々とした無欲達観の人で筆に生涯を託し、純朴な楷書と次々と豹変する狂草で、漂泊

の魂を表現して世俗を超越した明治から昭和期の日本書道界の第一人者として活躍した。酒仙としても知られ、書道界で初めて日本芸術院賞を受賞する（昭和26年（1951））。本名は川村慎一郎、別号に酔仏居士、酔驥、長嘯庵主人などがある。

みさわかつえ
三沢勝衛 明治18年（1885）～昭和12年（1937） 教育者・地理学者

更級郡三水村（現長野市信更町三水）に生まれる。検定で教員資格を取り、大正9年（1920）長野県立諏訪中学校（現長野県諏訪清陵高校）教諭を勤める。野外調査を中心とした独自の地理教育を行う。太陽黒点の観測をはじめとする天文学の研究に打ち込み、総合的で独創的な風土論を展開した。県下の小中学校で教え、教え子からは古畑正秋（天文学）、藤森栄一（考古学）、矢沢大二（地理学）、諏訪彰（火山学）、新田次郎（作家）など多くの文化人、学者、研究者を輩出している。また信州の冬の厳寒と乾燥を利点視し、凍み豆腐、寒天作りなどの産業振興を勧めた。著書に『風土産業』、『郷土地理の観方』、『新地理教育論』などがある。

あおきぎさく
青木儀作 明治22年（1889）～昭和40年（1965） 煙火師

上水内郡安茂里村差出（現長野市安茂里差出）に三男一女の末子として生まれる。早くから村社久保寺煙火行事に参加して花火と関わり、地元には藤原善九郎経営の煙火工場もあり、花火に関心を寄せ研究を重ねた。大正5年（1916）には煙火製造業に専念する花火師となる。

芯入り花火を研究し、抜芯技法を創始完成して、昭和3年（1928）に多重芯割物（八重芯菊花火）の製法を完成させ、各地で開かれる花火競進会では優勝の成績を重ねて、「紅屋青木」の盛名は全国にとどろくに至った。美しい色を出す火薬の粒を星と呼んでいるが、色の違った薬を二重、三重に掛け重ねる掛け星は日本独特の変色星で、青木儀作が工夫完成させた。日本の花火を最高芸術品にまで昇華させた功労者であったため、昭和34年（1959）には黄綬褒賞を受章し、これに伴い昭和36年（1961）には日本煙火芸術協会が誕生し、青木が会長に就任した。儀作の技術は、子息多門に継承され、さらに華麗なものとなる。



おおひらきまた
大平喜間多 明治 22 年（1889）～昭和 34 年（1959） 郷土史家

埴科郡東寺尾村（現長野市松代町東寺尾）に生まれる。遊民と号した。10 代後半から文芸活動をはじめ、「勸業新聞」、「中信時報」の記者をし、昭和 12 年（1937）から昭和 30 年代まで松代町会議員を務めた。自らの職業を「著述業」とし、実地踏査を踏まえて郷土史の研究を続けた。大正 7 年（1918）から 10 年間で、松代町史編纂主任に専念し、『松代町史』を完成させた。大室古墳群の 168 号墳は、大平が調査したため、大平塚とも呼ばれている。昭和 4 年（1929）に埴科郷土研究会、昭和 8 年（1933）には北信郷土叢書刊行会設立の中心メンバーとして活動。著書に『松代風土記』、『真田幸貫』、『佐久間象山』、『真田幸弘と恩田木工』などがある。松代町東条出身の中村柊花と親交を持ち、詩や和歌なども詠んだ。



4 長野市の文化財

長野盆地や周辺の山地、千曲川や犀川が形づくった歴史の舞台に国宝の善光寺本堂をはじめとする多くの文化財が存在している。令和4年（2022）1月現在、本市には国指定等の文化財が191件、そのうち国宝・重要文化財が31件含まれる。長野県指定の文化財は58件ある。市指定の文化財は290件あり、指定のほかに、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が8件、文化財を支える技術（選定保存技術）が1件あり、合わせて299件の市の文化財がある。

令和4年（2022）1月現在

	種別	指定・区分		件数	種別内訳
国 191	有形文化財	指定	国 宝	1	建造物 1
		指定	重要文化財	30	絵画 2、彫刻 15、工芸品 3、書跡 2、歴史資料 1、建造物 7
		登録	登録有形文化財	137	建造物 137
	民俗文化財	選択	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	1	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 1
	記念物	指定	史跡・名勝・天然記念物	7	史跡 6、天然記念物 1
		登録	登録記念物	8	記念物 8
	伝統的建造物群	選定	重要伝統的建造物群保存地区	1	宿坊群・門前町 1
	重要美術品			6	絵画 2、工芸品 2、彫刻 1、書跡 1
県 58	有形文化財	指定	県 宝	31	彫刻 8、絵画 2、工芸品 7、建造物 11、考古資料 1、書跡 2
	民俗文化財	指定	有形民俗文化財	1	有形民俗文化財 1
		指定	無形民俗文化財	4	無形民俗文化財 4
	記念物	指定	史跡・名勝・天然記念物	22	史跡 5、名勝 1、天然記念物 16
市 299	有形文化財	指定	有形文化財	141	書跡 2、文書 10、彫刻 27、絵画 8、工芸品 15、考古資料 12、歴史資料 3、建造物 64
	無形文化財	指定	無形文化財	7	無形文化財 7
	民俗文化財	指定	有形民俗文化財	14	有形民俗文化財 14
		指定	無形民俗文化財	9	無形民俗文化財 9
		選択	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	8	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 8
	記念物	指定	史跡・名勝・天然記念物等	119	史跡 46、名勝 3、天然記念物 69、名勝・天然記念物 1
	文化財の保存技術	選定	選定保存技術	1	文化財の保存技術 1
合計			548		

国・県・市指定等の文化財件数一覧

(1) 国指定等の文化財

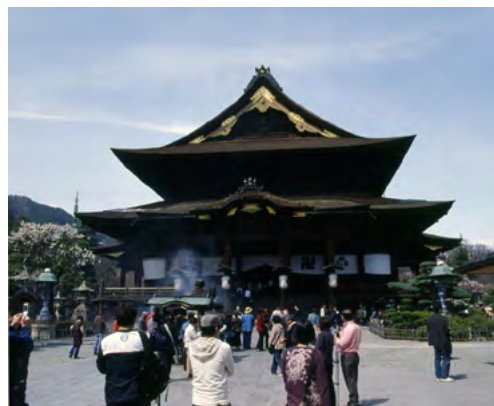
本市における国指定有形文化財の建造物は、国宝では善光寺本堂1件、重要文化財では、善光寺境内に2件（三門、経蔵）と松代地区に3件（松代藩ゆかりの真田信重霊屋と真田信之霊屋の2件、松代藩中級武家屋敷である旧横田家住宅1件）、そのほかの地域で神社本殿が2件（葛山落合神社、白髯神社）あり、室町時代、安土桃山時代、江戸時代の築年になるものがある。

重要文化財のうち美術工芸品は、白鳳時代の小金銅仏（銅造観音菩薩立像）が時代的に最も古い文化財であり、次いで奈良時代から平安時代初期に比定される牙笏（戸隠神社）、平安時代の鉄鍬形（若穂保科の清水寺）がある。また、他県からの客仏であるが平安時代の木造仏（若穂保科の清水寺の木造聖観音立像ほか7軀）、松代町西条の清水寺に木造千手観音立像ほか2軀がある。

記念物のうち史跡は、古墳時代の前期古墳1件（川柳将軍塚古墳・姫塚古墳）、中期古墳1件（埴科古墳群）、中期から後期古墳で積石塚を特徴とする大室古墳群（166基）がある。松代地区では、松代藩ゆかりの松代城跡附新御殿跡、旧文武学校、松代藩主真田家墓所がある。

天然記念物は、長野市北部の山間地にある素桜神社の神代ザクラが1件ある。

登録有形文化財（建造物）137件は、江戸時代後期から明治時代の建築物が大部分で、大正時代から昭和時代初期のものを少数含む。善光寺周辺地区では20件（旅館・商店の店舗等）、松代地区では79件（寺社、店舗、個人住宅等）あり、この両地区に集中する。登録記念物（名勝地関係）は、松代藩武家屋敷地と神社の庭園8件がある。



善光寺本堂（元善町）



旧横田家住宅主屋（松代町）



銅造観音菩薩立像
（若槻吉字山千寺）



木造千手観音菩薩立像
（清水寺）

民俗文化財は、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 1 件（高岡の小豆焼き行事）が選択されている。このほか、絵画・工芸品・彫刻・書跡あわせて 6 件の重要美術品がある。

伝統的建造物群は、戸隠神社中社社殿と宝光社社殿を基点とする中社地区と宝光社地区の宿坊群・門前町からなる戸隠伝統的建造物群保存地区 1 件が、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。保存地区は、戸隠神社中社と宝光社の表参道周辺に形成された江戸時代の敷地割や道、水路などの構成がよく維持されており、標高が高く厳しい環境の山間であって、江戸後期から近代にかけて隆盛した戸隠信仰のもと、多くの参詣者を受け入れて大型化した宿坊が、民家や石垣、生垣、庭園、樹木等と一体となって優れた歴史的風致を維持している。



戸隠神社門前の町並み（中社地区）

（2）県指定の文化財

市内には 58 件の県指定文化財があり、有形文化財の建造物は、室町時代後期の葛山落合神社境内諏訪社社殿を最古とし、戦国時代から明治時代後期までの寺社の本堂・本殿・経蔵・表門、武家住宅、師範学校教師館、宣教師住宅など 11 件があり、松代地区に 7 件が集中する。松代町の熊野出速雄神社本殿は、中世の熊野系の修験を伝える建築遺構である。



熊野出速雄神社本殿（松代町）

絵画は、善光寺大勧進に鎌倉時代後半から室町時代初期の極楽往生を願う善光寺信仰に関わる掛幅画 1 点（絹本着色釈迦三尊像）と、善光寺淵之坊に伝わる室町時代の絵解き図である掛幅画 1 点（絹本着色善光寺如来絵伝）がある。

彫刻は、平安時代中期から鎌倉時代後期の仏像 8 件（9 軀）（木造伝観音菩薩立像、木造金剛力士立像など）が市内に点在している。

工芸品の玉依比売命神社児玉石（591 個 松代町）は、正月の予祝行事である児玉石の玉改め神事に用いるもので、毎年玉の数が増減する。



芦ノ尻の道祖神祭り（大岡）

民俗文化財は、長野盆地平坦地の巨大なわら人形と男根をつくるドンドヤキ（長谷及び

越のドンドヤキ)、山間地では石碑の上に注連縄で神面を形づくる道祖神祭り(芦ノ尻あしのしりの道祖神祭り)、神仏混淆の時代から伝わる戸隠神社太々神楽などが無形民俗文化財になっており、独特な民俗文化の一端を伝承している。

記念物のうち史跡は、合掌形石室を有する古墳が松代地区に2基(菅間王塚古墳すがまおうづかこふん、桑根井空塚くわねいそらづか)ある。菅間王塚古墳は、積石塚としては県内最大規模の古墳であり、史跡大室古墳群とともに市域の積石塚、合掌形石室墳の地域性を良く現している。

山岳信仰を母胎とする修験の霊場として知られる戸隠神社奥社・中社・宝光社(顕光寺奥院・中院・宝光院)は、戸隠神社信仰遺跡として史跡となっている。信州新町の牧之島城跡は、武田信玄が馬場信房に築かせた武田流の平山城で、戦国時代の縄張りをよく残している。

これらの長野市域の県史跡は、古墳時代、平安時代から江戸時代、戦国時代の各時代の歴史を語る上でポイントとなるものである。

天然記念物は、樹木(戸隠神社奥社社叢、真島のクワ、戸隠豊岡のカツラなど)のほか、市域の大地の形成を物語るシンシュウゾウ(戸隠川下)、クジラ(信州新町山穂刈)やセイウチ(信州新町越道、中条日高)などの化石類や地質標本(若穂綿内の大柳及び井上の枕状溶岩、鬼無里深谷沢の蜂の巣状風化岩)がある。



戸隠神社奥社社叢(戸隠)

(3) 市指定等の文化財

市内には、299件の市指定等の文化財があり、このうち有形文化財が141件、記念物が119件あり、これらで大半を占めている。

有形文化財は、建造物が64件で平安時代の石造多層塔を最古とし、鎌倉時代から室町時代の石幢せきどう(松代町東条)、石造宝篋印塔せきぞうぼうきょういんとう(元善町、七二会、若穂川田)、源関神社本殿げんせきじんじや(松代町豊栄)、諏訪神社本殿(浅川西条)等の7件、そのほかは江戸時代の神社本殿もりたのじんじや(守田迺神社本殿、北郷朝川原神社など)、武家住宅の表門(矢沢家の表門、



石造多層塔(篠ノ井)



木造伐折羅大将像(大本願)

旧白井家表門)、鐘楼(旧松代藩鐘楼など)、武家住宅(旧樋口家住宅)、町家(寺町商家(旧金箱家住宅))、高札場(有旅の高札場)、霊屋(大鋒寺真田信之霊屋)等の38件、明治時代の学校(旧作新学校本館)、神社本殿(荒倉山神社本殿、金刀比羅神社本殿など)等の13件がある。

彫刻は、平安時代の仏像(木造阿弥陀如来立像、木造毘沙門天像など)が6躯、鎌倉時代の仏像(木造聖徳太子立像、木造伐折羅大將像など)7躯、室町時代の仏像(石造地藏菩薩坐像、木造釈迦如来像など)が5躯、戦国時代から江戸時代の仏像(木造大日如来坐像、木造地藏菩薩半跏像など)9躯、江戸時代の石造と木造の百体観音像(観ノ山、常源寺)などが市内全域に分布している。

考古資料は、川柳將軍塚古墳出土の埴輪円筒棺など12件がある。

工芸品は、鬼無里地区に江戸時代から明治時代初期の神楽(白髯神社、加茂神社)や山車(鬼無里神社、皇大神社など)6件、元善町に仏具など(五鈷鈴、木造百万塔など)4件、木造百万塔3件(西光寺ほか)、漆地彩色装神輿(玉依比売命神社)など2件がある。

文書は、戦乱による村の荒廃を物語る「失人」の記載が見られる「文禄四年中氷鉦村下氷鉦村御検地帳」(1595)など10件がある。

無形文化財は、修験道に係る宣澄踊り(戸隠)、松代城大門前で踊る盆踊りの一種である大門踊り(松代町)など7件がある。

有形民俗文化財は、西町上区の山車、松代藩の御用窯として江戸時代に栄えた松代焼コレクション、庚申講人別帳及び用具(中越、妻科)、門灯笼と舞台(小島区)など14件がある。

無形民俗文化財は、太神楽や獅子舞(犀川神社太神楽、赤野田神社太神楽など)、雨乞い祈願の三十三燈籠(篠ノ井塩崎)、悪霊をしずめて村の外へ送り出す犬石の虫送り行事(篠ノ井有旅)、予祝行事である玉依比売命神社の御田祭・児玉石神事・御判神事(松代町東条)など9件がある。

記念物は、史跡が46件で集落跡(宮遺跡、宮平遺



川柳將軍塚古墳埴輪円筒棺(篠ノ井)



文禄四年(1595)中氷鉦村下氷鉦村御検地帳(稲里町)



西町上区の山車



犀川神社太神楽(安茂里)

跡など)、古墳(中郷神社前方後円墳、竹原笹塚古墳など)、城跡(葛山城跡、横田城跡など)、寺跡(神護寺跡)、善光寺参道(敷石)などがある。天然記念物は、カワシンジュガイ(戸隠)、葛山落合神社社叢(入山)、荒古のサクラ(豊野町)などの樹木、ハチノス状風化岩(鬼無里日影)、奥裾花のケスタ地形(鬼無里日影)などの地質関係など69件がある。名勝と天然記念物を包括したものに樋知大神社境内のお種池及び社叢と湿性植物群落がある。そのほか桐原牧神社の藁馬づくりが保存技術(選定)となっている。



竹原笹塚古墳(松代町)



カワシンジュガイ(戸隠)



主な指定等文化財分布図



(4) 指定等以外の文化財

①歴史的価値の高い建造物

○善光寺周辺の宿坊・仲見世の建造物群

善光寺周辺の歴史的建造物群は、善光寺本堂境内地、大勸進と大本願の本坊、宿坊群、仲見世が所在する元善町と一部東之門町と上西之門町を含む範囲である。

大勸進の敷地内には、護摩堂、無量寿殿、行在所、萬善堂、奥書院などの31の建造物が建ち、中庭には沈香亭（茶室）と庭園が配されている。



善光寺周辺の宿坊群

大本願の敷地内には、光明閣、本誓殿、表書院、寿光殿などの19の建造物が建っている。大勸進と大本願に建つ建造物の多くは、大規模なものであり、きわめて剛健な景観を提供している。

宿坊は、僧や参詣者の宿泊に当てられている院坊で、現在善光寺本堂境内地の南側に大勸進（天台宗）の下に25院と大本願（浄土宗）の下に14坊の計39の宿坊がある。個々の宿坊の建造物は、主に「本尊が安置されている場」と「参詣者が宿泊する場」と「寺族が生活する場」からなっている。「参詣者が宿泊する場」と「寺族が生活する場」は一体となっており、庫裡と呼ばれている。一方、「本尊が安置されている場」は、大御堂である善光寺本堂に対して小御堂と呼ばれている。宿坊の建造物は、明治24年（1891）の大火で大半が焼失し、その後には再建され、参詣者の増加に伴い、水平方向と鉛直方向に増築が行われ、半数以上が3階建以上の建物が密集する木造建造物群を形成している。

仲見世は、かつて旧伽藍が建っていた堂庭であるが、現在は旅館や仏具屋、土産物屋など56軒の店舗が参道両側に軒を並べ、個々に個性豊かなファサードを構えている。



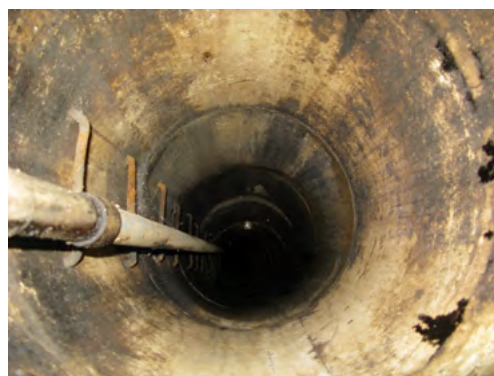
仲見世の町並み

②近代化遺産

○浅川油井

浅川油田の採掘は、宝暦3年（1753）の『千曲之真砂』に記載があり、江戸時代中期まで遡る。明治4年（1871）に石坂周造が長野石炭油会社（後に長野石油会社となる。）を

設立し、日本で最初に商業生産が行われたが、生産量は思うように増えず、長野石油会社は倒産した。その後、大正期以降にガラス工場の燃料として石油が使われ、薬瓶を製造した。昭和42年（1967）にはガラス工場が廃業し、昭和48年（1973）には石油採掘は終わりとなる。現在の井戸は、昭和22年（1947）にコンクリートによる井戸枠を設けたものであり、石油層まで約50mある。現在は、浅川ループライン真光寺ループ橋の下に石油井戸が残されている。県内には、飯山市富倉などに油田があったが、県内で油井が残る唯一の事例である。



浅川油井

③遺跡

○宮崎遺跡

宮崎遺跡は、長野盆地南部の若穂保科に位置し、保科川と赤野田川によって造られた複合扇状地に立地する縄文時代中期後半から晩期に営まれた縄文集落である。三方を山に囲まれる一方、北西に向かって広がった扇状地の先には、現在の千曲川と犀川の合流部を望むことができる。昭和60年（1985）及び昭和62年（1987）に発掘調査が実施され、住居や墓地などが発見されたほか、多量の土器や石器、様々な装飾品が出土し、市内を代表する県内有数の縄文遺跡であることが判明している。その後も立命館大学による継続的な学術調査が行われ、貴重な発見が相次いでいる。



黒曜石の石塊が納められた深鉢
(宮崎遺跡出土品)

宮崎遺跡1号住居跡の床下からの黒曜石の石塊を納めた深鉢、そのほかヒスイで作られた垂飾や蛇紋岩で作られた磨製石斧、サメの椎骨を利用した耳飾など、宮崎遺跡



耳飾（宮崎遺跡出土品）

の周辺では手に入らないもので作られた遺物が多く出土しており、それぞれ他のムラとの交流によってもたらされたものと考えられる。

宮崎遺跡から出土した遺物のうち、特に目を惹くものに土製耳飾が挙げられる。土製耳飾は縄文時代の後期から晩期にかけて盛んに作られた「ピアス」で、宮崎遺跡からは長野市調査分だけでも130点以上の土製耳飾が出土している。

また、3号石棺墓では、埋葬された人骨頭部の耳の辺りに接して土製耳飾が出土し、土製耳飾の着装例を示す貴重な事例を確認している。

○松原遺跡

松原遺跡は長野盆地南東部の松代町東寺尾に位置し、千曲川とその支流である蛭川によって形成された自然堤防上に立地する。平成元年（1989）より上信越自動車道建設に伴う発掘調査が長野県埋蔵文化財センターにより実施され（高速道地点）、縄文時代から中世に至る各時代の包含層が千曲川の洪水堆積層を挟んで存在することが判明した。また、周辺では長野市教育委員会によって5地点が調査され、集落の広がりや変遷が明らかにされている。



磨製石戈（松原遺跡出土品）

縄文時代では地下4～5m下から発見された縄文時代前期から後期にかけての集落、弥生時代では中期後半の大規模な環濠集落と大量の土器群とともに祭祀具である磨製石剣や磨製石戈などが出土し、古墳時代から中世までは各種遺物遺構が確認されている。松原遺跡は大規模な埋蔵文化財包蔵地で調査されたのは一部であり、大部分は地下に保存されている。

○塩崎遺跡群

長野市南部の篠ノ井地区には、約6kmにもわたる大規模な自然堤防が千曲川左岸に形成されている。この自然堤防上には弥生時代以降の集落遺跡が濃密に分布しており、自然堤防を横断する小河川によって塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群に大別される。



木棺墓出土土器（塩崎遺跡群出土品）

このうち、塩崎遺跡群は最も上流側にあり、千曲市稲荷山から聖川までの南北約2km、東西最大600mの範囲に展開する。

塩崎周辺の遺跡については、小島貞雄氏による松節遺跡での武器形青銅器の発見や、荒井籐四郎氏の伊勢宮遺跡採集資料が学界に紹介されたことなどにより、昭和30年代には広く認知されていた。特に荒井氏の採集資料には縄文・弥生移行期の土器・石器が含まれ、北信濃における弥生文化導入期の重要資料として注目されるようになった。なお、この時点では採集地点ごとに遺跡名が付与されていたが、各々を明瞭に区分することは困難で、本来的には共通の環境に立地した一連のものであることから、現在では「塩崎遺跡群」として把握され、これまでに長野市教育委員会によって木棺墓群や方形周溝墓群など5地点

8 次の調査が実施されている。

○篠ノ井遺跡群

篠ノ井遺跡群は長野市南部の篠ノ井地区に所在し、千曲川左岸に約 6 km にわたって形成された大規模な自然堤防上に立地する。この自然堤防上には弥生時代以降の各時期の集落遺跡が濃密に分布しており、自然堤防を横断する小河川によって塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群と便宜的に大別されている。このうち、篠ノ井遺跡群は聖川と岡田川によって区切られた東西約 2 km、南北最大 500m の範囲に展開する。

これまでに、長野市教育委員会によって 8 地点の発掘調査が実施され、「甄仏」や「専司」刻書土器、前方後方形周溝墓などが出土し、高速道と新幹線の建設工事に伴って長野県埋蔵文化財センターによる大規模な発掘調査が実施されている。



甄仏
(篠ノ井遺跡群出土品)



「専司」刻書土器
(篠ノ井遺跡群出土品)



前方後方形周溝墓 (篠ノ井遺跡群出土)

④古墳群

○長原古墳群

長原古墳群は、長野市南東部の若穂保科に位置し、保科川が形成した扇状地の扇中央部に位置している。かつて 21 基の古墳分布が確認されたが、昭和 42 年 (1967) に実施された若穂団地造成に伴う発掘調査によって、12 基から 13 基ほどの古墳群であることが明らかとなっている。若穂団地造成事業では、5 基の古墳が現地保存され、破壊される 11 基の古墳が調査対象となった。このうち、4 基は古墳ではない石積みと判明し、7 基の古墳について発掘調査が実施されている。



長原 7 号墳

長原古墳群は 6 世紀後半代から 7 世紀代にかけて形成された小規模な群集墳であるが、多彩な出土遺物に加え、扇状地扇中央部という立地やすべてが積石塚古墳という他の古墳群では見られない特性を有している。特に積石塚古墳から朝鮮半島系の遺物が出土 (7 号墳、

短頸壺) するなど、長野市を代表する古墳群のひとつである。

○吉古墳群

吉古墳群は、長野市北部の若槻地区に位置し、三登山東南麓の丘陵上や山麓斜面に分布している。昭和30年代から40年代に長野吉田高校地歴班が分布調査・測量調査・発掘調査を継続的に実施し、98基の古墳の分布が確認されている。墳丘規模は10～15mの大型墳、5～10mの中型墳、5m以下の小型墳に分けられ、中・小型墳が80%を占めるなど、小規模古墳が主体となる群集墳である。発掘調査は98基のうち、10基の古墳で実施されている。



吉3号墳

31号墳・33号墳は、盛土墳丘内に二基並列した合掌形石室が確認されており、古墳群中の確認事例がすべて二基並列となる事例は他にはみられない。3号墳は、横穴式石室で、玄室奥壁の中央部には、合掌している人物像らしき線刻画が描かれている。この線刻画が当初より描かれていたかどうかは定かではないが、装飾古墳の一例として報告されている。



吉33号墳

吉古墳群は古墳時代中期後半代に遡る合掌形石室を埋葬施設とする古墳を起点として群形成が始まり、古墳時代後期後半代に多くの古墳が築造された、長野市北部地域を代表する群集墳である。

⑤山城

千曲川、犀川、裾花川等の河川が長野盆地に流入する平地や扇状地を取りまく山々の山頂や尾根の頂部に約80ヶ所余りの山城、豊野と戸隠・鬼無里・大岡・信州新町・中条の西山部地域に約30ヶ所余りが確認されている。築城主体者は戦国大名や在地国人層、さらに国人層下位の階層に至るまで多様化しているが、現在確認できる城郭は、その構造から基本的に戦国時代に築城もしくは改修されたものが多く、安茂里の



旭山城（市内安茂里旭山）縄張り図

旭山城は、川中島の合戦における武田氏の軍事拠点であった。小柴見城跡（長野市安茂里

平柴)、塩崎城見山砦跡(長野市篠ノ井塩崎)、赤沢城跡(長野市篠ノ井塩崎長谷)などで発掘調査が実施されている。

これらの山城は、後世の耕作等で改変されているところもあるが、多くは開発の手が及んでいないため比較的良好に堀切、塹堀、曲輪、土塁、石積みなどの遺構が残っているところが多いため、中世の歴史をたどる上で貴重な資料を提供している。

⑥宿場

○丹波島宿

丹波島宿は、慶長16年(1611)に、北国街道を善光寺経由に改めた際に設置された宿場で、東西6町(約654m)、幅4間(約7.3m)のまっすぐな道をつくり、その両側に間口8間、奥行22間の屋敷をほぼ均等に区画し、「六十六判」といわれる町をつくり、66軒が伝馬役に当たった。宿場中央部北側に本陣の柳島家、脇本陣と問屋を兼ねていた柳島家が広い敷地を有していた。西の突きあたりに産土神である於佐加神社があり、北国街道はそこで直角に折れて南に進む。ここから善光寺方面へ向かうには市村の渡しで犀川を渡る。宿場は岸囲堤防・国役堤防・宿囲堤防が順次築かれ、洪水から守られていた。道幅、まちなみなどに往時の姿を垣間見ることができる。



丹波島宿問屋兼脇本陣柳島家

○川田宿

川田宿は、慶長16年(1611)に、北国街道松代道の宿場として指定された。矢代宿で本街道と分岐した松代道は、松代・川田・福島へと千曲川の東側を通過して布野の渡しで千曲川の西側に移り、長沼・神代を経て平出で再び本街道と合流する。

元文3年(1738)6月、千曲川の洪水により川田宿の田畑屋敷が流失したため、翌年200間ほど南の位置に計画的に新しい宿場がつけられた。

宿場は北に開かれた「コ」の字型で、下横町、本町、上横町の3町で構成されている。本町の中央北側に間口24間の本陣兼問屋の西澤家が置かれた。本町の両側に38軒の町屋が配置され、両横町の道はしに用水が通り、本町では中央に水路が通っていた。宿場の両端には火伏せの神として秋葉社が祀られている。本陣兼問屋であった西澤家、秋葉社など往



川田宿本陣西澤家と高札場

時の宿場景観を今に伝えている。